



三

玉斜亭

初やわかのまゝ運り 金所 白華

竹の福壽もどくれば 我文

とて山吹ははるまじく 句龍

其二

古きや行く難き 水之道 公家

掃くもやまらぬ花の炭俵 象文

鳴沙を巨漕子やこもる 句龍

歳旦

冠羊節

たぬきのや既に戴く 初日 木虎

孫々膝に居るの曲水 楠芽

孫納は長嫁入るといふ人 明彦

其二

石梁舎

わら玉をこめさう 初日 明我

四方をこめさう 木席

花の蔭のこめさう 楠芽

よあけの山に雪をまて初笑ひ 楠芽

むつとけりし新しき月 明徹

天津ノ百日をまて見所を 木席

年尾

けとすけいしはたぬ大文字 楠芽

わとをと揃じや花の逢花 明徹

おとよ不器用者かふりあり 木席

歳旦

改まる身と 露月舎 郊花

やと津冷霜の春

元 皇徳隣 鍊花

浮世の寶具を此

年尾

百姓の御くはる哉 蝶花

あさまたは安きし 郊花

の市

年以立春

定りし水は舟に十石也

陳壽

年以立春と云ふ

春風

凍やちりやよ

郊外

流るる水は舟に十石也

又元日

山下の土まわりのこと
山下の谷の事

多岐の麓に子守の舟に初日

隠し居るもの多し舟に初日
舟に初日
所謂曼倩は仕限りありし事なり

大正三年

追加除元

買揃りし舟に初日

舟に初日

右標字

歳旦

標山画



歳暮

少くもお造り之を越せば御訪の御

右 貞舟

歳旦

公勝小彦子と松平小七とをの事を
在坂長壽
江英舎
先抄於
四里ふゆるとし
小到ふ

浪平付中蝦夷此時をば月賀 弟賀

門松毎々東うう風 亜龍

馬を於行遊ハ拍子と喜 穎巨

其二

南部田名部
草明室

免よりあ小控の戸あけし新の表 穎巨

千里此風小寄と礼 弟賀

規とるに於ふも邪たをて 亜龍

其三

兄弟を此中にあけ親子草

吾星菴

亞龍

旭へ抱きかかるとまじりて

頴巨

勝と窮女院先うらうらとん

弟賀

歳暮

名跡あふいとを二刀平幸の海

頴三

若を捨てりてを足利除杖の縁杭

弟賀

弟事や尻を掲げ帆掛舟

亞龍

善興

美一矢

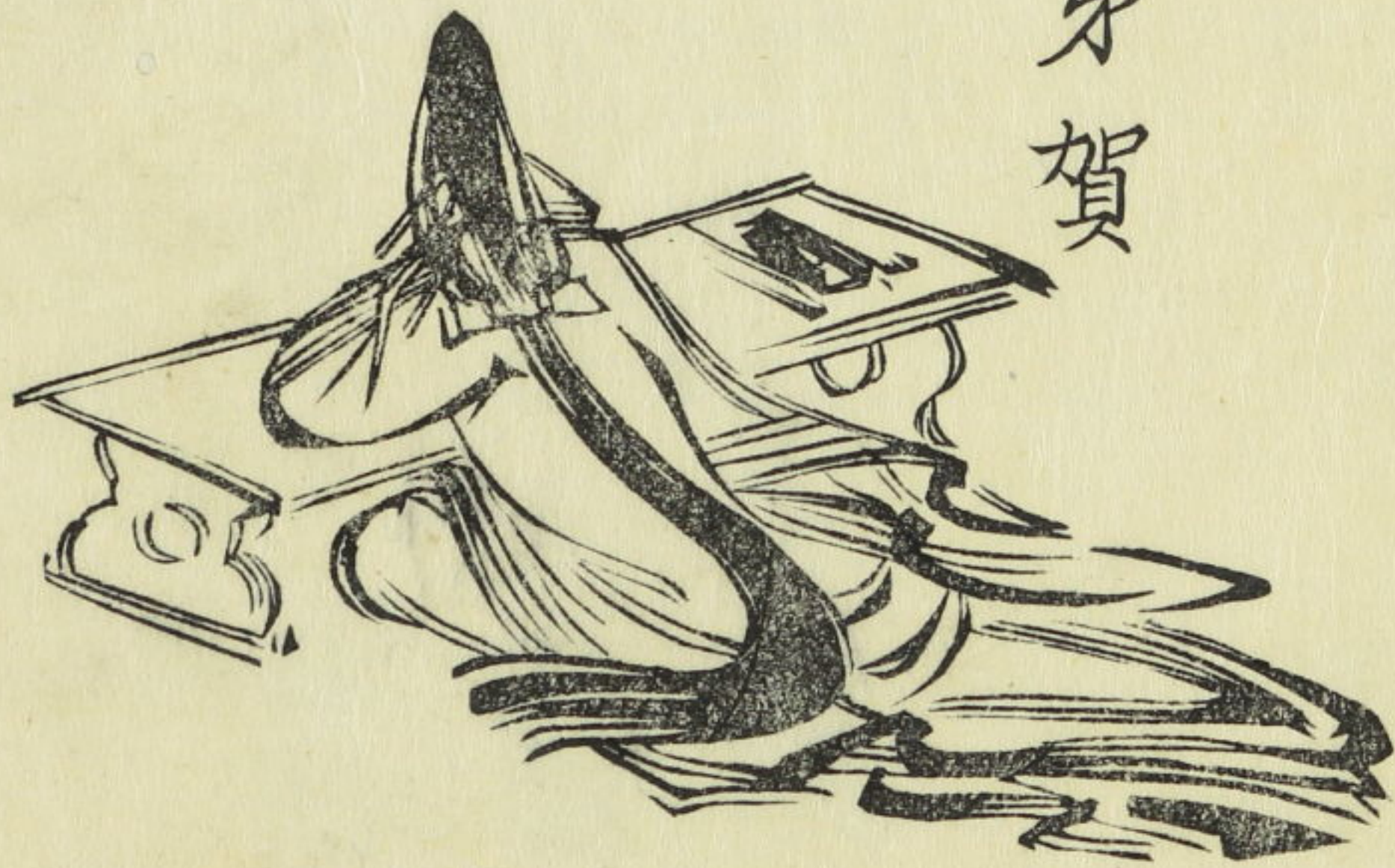
弟賀

塵塚と

あり

子とるに

これ



歳旦

大福平欲たよき人としよき

萩園

杜洲

あつねあつねを御夢永日

白紙

ゆきんあひとく何ん哉

りきき

頁舟

忠厚

是る是るぬ間小合道

と水ぬ

杜海

歳旦

若死名我父母、捧ん如之餅

環雄

幾代にまね千寿万歳

白紙

樹をまよはれ狭小ちよんと精也

楠芽

歳暮

園又しきりおとんはるる也謀

環雄

歳旦

初書巾小ほんきき餅まの 句嵐

先東君へ謹みり礼 句松

水あらしせ癒部らるるを 句花
後らるるを

歳暮

賑やうふかきぬ年の終り 句岩

歳旦

競ひたり馬の蹄は初卯也 句度光

春興

厄の神はくまの毒氣のびは 句

春興

梅咲布衣まきの益也 句

さかすか

試筆

恭通天地外淑景一時催忽聽
鸞歌曲欣然啣壽杯

嘗や世界ほひやと山をり色

春興 田文

岸小咲くまはれこの流をまよひて

右 白陽齋梅山

歳旦

上街連

心細小祝收とあり

南梅郷

明のまよふとやり子綱を 夫山

うまの 拍子小ぢりし初爰 素龍

東の波もし被をきけりて 楠芽

歳暮

世は事此十二股をやまき拂 夫山
爰の空こころの境より忘 楠芽

元旦

乗雲舎

日影さかえりききしん 素龍

百のしと初あねの音 夫山

中ねさうらわん 楠芽

歳暮

晴より余るまゝの 幸丸

柴火のこまあつたりの 楠芽

元旦

手代おとしほれ

何れけのま

春 酒人

歳暮

うんたてふ

毛唐ぬけ上

戸山 楠芽



歳旦

大福吊我あたまらの釣日山

柳窓人

前風

妻小江戸あふぬつれ初春

赤松

坊主持おつとむらう梅提て

楠芽

案名

戦津たりの歯乃宗春

皮

赤風

年内
三春

いねるむ水分山のとれ斐

楠芽

歳旦

神風花子代め事

青芽

綱此帆うきうき

うきうき此江もら

楠芽

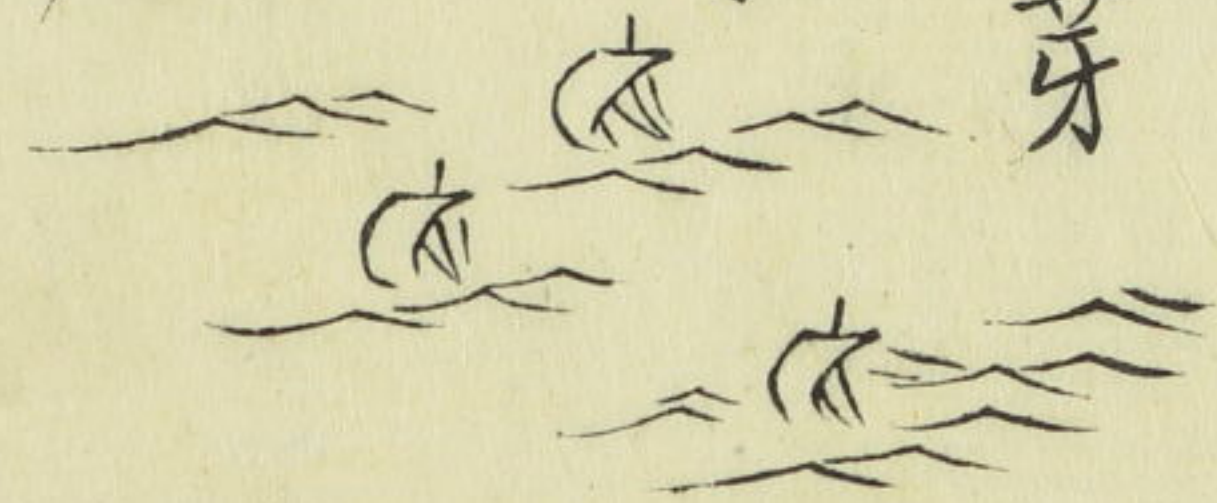
門松の岸

案名

松風の音よからん

青芽

り



歳旦

田中氏女

遠き方にどけきの子を

あはれ

乙夏

舞の音息の舞し阿松

楠芽

はらう物衣刀形りのきも履きて

龍母

中興

けしう巾袖にう履のきもはけえ

楠芽

きも袖巾を膝掛けふるは衣水道

塵塚の湯うまの持るいや紐子のき

る子なる啼巾よりの巾あま

歳旦

楠葉

門松をまこ

吹流し

きり

春

きり



梅の香や糸をうらみ車山家

斗相

はるはの梅はし
楠芽子れめしきりて
手始出雲をさく糸
俵の中に居ては骨
をかき休

なよ雨ハ十八の春をさるる

有馬

其雷

松に申よき万葉の袖

楠芽

青樓夜梅

雪の影をさしけりて雪の梅

赤風

燈をさく下名馳出まや園の梅

素花

誰が雪をさるる白の梅

楠芽

春興

梅枝ありて雪をさるる

忘る花をさるる 楮文

梅をさるる

梅をさるる 楠芽

梅をさるる

梅の影をさるる 楮文

梅をさるる



歳旦

雪やけふ乃多居いも神船

佐々木

越連

全

心まきまきや神れうも餅

釜三

海のワシム

信よしんれま屋敷よの礫うれ

楠芽

春興

うますや焚れハ二条の冷泉を

年忘

行よしをけすれうそや多礼講

と一の取めいきよまきの

名所山

喜啓

人口

身くい免費し係すや一初る葉

楠芽

春興

芥の葉やめこ根をばらま

今が川

まかへ傍あるはや立於落し

し梅やなのお通すやのり

山差峰止言

是清一門まあゆの歩を音

物とまゆまゆし別れ

病く死

安永より此妻初且と卯の日なれをきぬら
 さな依世のさち我へのと一尋の都的小
 富我出任のいふまは依山を中流花乃
 市街をばたれいふ中此ほらりま
 かうし依初日乃氣前初後歩の被り
 報さる案のき依その何ふあはし
 瑞ふ依青さけい色中縁替す
 連なる人小あきききまはし并楽小まは依
 御免なる幸々乃は山ま
 久くくならぬを松はけり小熱ひて
 らまよりの依係と名あはしむ岸の娘
 いかうして駕よりわと奥に天神小集らん

とがしたれ登りささ何やらん旅のころ
 してりうな依き未あは実のさ記り
 色とすとあききまは梅と一母の福之
 梅実一実うそ梅のほ一草
 けいハぬれをきこいたし着水小松を清ん
 濁もきを灌さ

菅神法樂
 水れとや中松の陰

住吉を納
 安永よりん神れ由思を梅乃笠

中代やまや一尋そ住吉の松れ妻
 毛中り是小新あ伊丹屋小まは碇中

寄竹馬翁

竹馬と珍菜 柳子や女史連

、昆布、

ぬりきりれ昆布よりほつき息よる

、焦飯、

飯のそけ狗もこうけ 園の梅

右 田中楠芽

州

信濃橋東の少通新し

春色や三月の暮風三つれ橋

曉雀

車と

目かよされぬと云なり 鴨の舌

迂喬

睦月十日甲子なる夕光

竹又咲き香あり初子れ日

十萩

道の寺よりきき

附親のしきを別なり梅のお

えの卵卵のりちれ

岸の飛静と 卯此日のけり

十京

年尾

どつと来依掛を 暮しせまの梅

十一

歳始

大福和ふ子あそそに姉加減

車籠

半ふりうう清浄かき福北玉

白龍

花の暮出千の糸顔をて

我丈

まひ

揺る鷹餅き高砂小

車籠

はさいよん

妻坊か

あらかお伊勢へ梅こし瓶のこ

白花

物とれ日たき火き殿喜はる惚

勺龍

と向とことおまいよけ子おむれ

我丈

染つけの陰乃まらさうまも

白花

月の人堤くふ庭まきしきま

白龍

けひやしくおまむやいさむ

我丈

山寺花狼の鳴くよめおれ

白花

一里あらうふとろもつふ

と附られおやまたなごときつらき

白朧

恥づきもあらずと人いよと云

、

第度々根付の藤巻を多きと云

、

新く移るれは色も子の雲

、

廿日月ささけを連はらりもささ

、

所へ人橋のまき名樹しる

、

此流のへ名樹の堀雨も元次

、

はをさるむし 揚るまはり歌

、

花の暮り波く徳ふゆはと云

、

乃まこ麻のきつろしと

、

と聞けそ人しとてしつらぬのぬ

白朧

一日は降しとていつらあやう

、

かたむらむは江戸へ往く城かひまや

、

見抱のけり馬の、初と世

、

美由のけりら小きもやうしれ

、

多しむらうとてか住れきは

、

下り橋あされをききへ礼をま

、

よと云 戻何れをきき

、

六海をうらみおの流しおひや

、

一建まむらうしほとて

、

十一
九

妻の中へさうふー月北かき氷んは

びんはくと思ふ極のちか味

ぼこ頭吳おぢふさ海向しー

せうとせもなふち極友きさ

祢ふるともさるは是えを信さ

六乃名あハ神也領分

花ふとさ仕合吉しりけり

からぬ去のら踏れり友

早春

はちをさし心く髪ものひかり

このれさ

女是庵

各詠梅

嬌字

古井さ戸やそらら

現けり

あさ惚や穴の福あれ

んめれさる

嬌富

十一

十一十九
七

はれ園の玉川て
な——梅枝を
白花

花 福小御河内使和梅の
あよ

池と蓋
木床

し——和梅の
あうら

喜札のきしる
——あまの
あつ

佐田遥拜

昔あきし鳥居

おむや梅の風

貞舟

梅うや流

楠芽

きんぎょく

糸のきんぎょ

福正町の現記

郊花

芳中んまのむ

ふゆのあけ

結花

香炉はあこ

庵の梅

三十一
十九

三十一
三十一

君多子夜を叩き交ひし腋の虫
備お海利も中これたゆめ
妻以月八身此花はあろと
今まの入れをなす
突おきけおきくしと并乃尻
唯お誂おきくるこれま
唐くに六十六歌なかり
膝のらん小何さう初花
は冬まあ地小成るはほろぬと
ふとあうはさうい忠の房屋

明暗
白花
夜光
本席
楠芽
白花
白花
明暗
本席
夜光

十
突響る男日傍さうと片まそ
又七小湯女れほ乃膝とて
十にてふまは暗て戸さうね代
あつと孔雀此書物小あ
花野り二を矢ま小ふと片糊
かまおゆる風小房さうさつ
月七靴抜出で彼れあうと
他玉のま女小境をさ
ごまのそい京秩小相多うと
ほろつきはめをまの真の寺

白新
楠芽
明暗
白志
夜光
本席
楠芽
白新
白志
明暗

赤

いとゆるり

得〜舞

乃上戸造

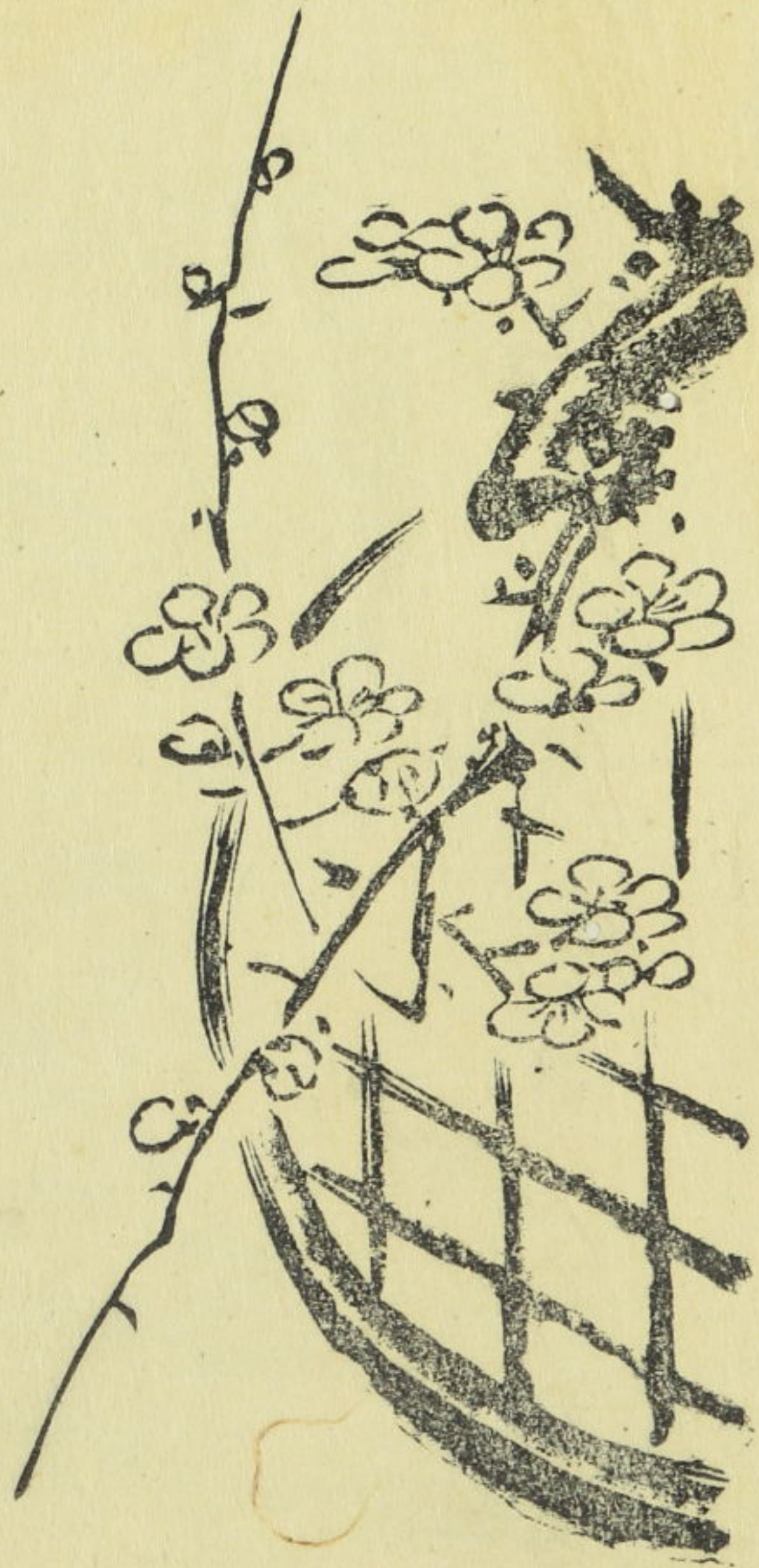
圭花



黄

町奉行の家を〜見ても
いけぬ舞の土

郊花



白

うらたき連歌も喜の

後みま

山花



黒



小
原
女
や

白
花

ほ
ち
一
出
て

よ
ふ
こ
あ
ら
し

冊子

歌僊

高津眺望

在坂
長寄

高者小なりは者之此百万高
 冬こり色に小娘くみし船
 大字と筆に雲をふくまをて
 鉄のこきと此掛色争しぬ
 冬初の内を回あり月さる友
 玉とつし時ありしやしうた
 せんまさけ馬のやいとにあらうて
 笑ふしとさ地のまきし山伏

弟賀
 白龍
 楠芽
 杜例
 我丈
 亞龍
 勿龍
 弟賀

後一海より又まきえのやいさ
 清うさるしとまのぬくく
 そのま小はくんとお小友おのれ
 丁度よれはひりくあまうを
 傍びて腕を物うりて絵天井
 斗ふ心小うりて玉張るをうん
 血弁興小すやし 解形はけり
 居るしてなをた暖茶の別業
 足とらよえのひ花は 和
 巾このたぬこの標の園西

杜例
 楠芽
 亞龍
 我丈
 弟賀
 勿龍
 楠芽
 我丈
 杜例
 亞龍

七十七

二
ふ先うゝ業のつきて来る凡中
髮削仕舞姫と抱きく
わく鏡の眼小言えありとゆ虫
未さば尺と侍るべいっハ
うと小従よりわあさうと舞也
近ささうとそのあここのを
た文揮嫁とてこたわおらさへ
丹の勝ふふ河さ侍教よむ
多るはとと林の上引くさそ
童 田代くし扱名のすげ

我文
弟賀
楠芽
杜附
句龍
我文
亞龍
楠芽
弟賀
句龍

方角を磁石次第の双陀寺
河井と同一し川越と痛
ゆく小喜おみあつてと我と
的場へ神とを連れて出る際
豆腐おお清所よさほよと
烏帽子とまは舞とら成物
曲の海いさほさる他人を
演のまおをさる我人まらり

杜附
亞龍
我文
弟賀
亞龍
楠芽
句龍
杜附

急景

行よしとまのりたあは
筆

句龍

十八

歳旦

餅 後也おる料理を

蝶富

この節

歳暮

鯉 鱈 行の十百負

お久

たうと——此波

嘉光

さうし 花又久しとるえむしめ

蒼御

らの 瑞花も花の葉木明の

杵龍

高か

船が 又久しとるえむしめ

杵龍

年尾

白鷺の 羽を 扇の 葉えし

賀御



御成敗式目

詩仙 世星菴乃宗匠小
再々して

志馬綱

久し振るまきと句 梅此を
 先を後世蒙りし痛くゆき友
 扱そりて他乃 縦輕小葩をきうて
 揚此は勝利 乃驕了とあく
 西小かたふ月太やこハひんつ歌
 ちやこの風よ秋もよらげも
 ちよよくと候く男へしとるれ道
 老をこし舞子此子乃評也

美天、
 句龍、
 美天、
 句龍、
 美天、
 句龍、
 美天、
 句龍、

おすまへいそりやうかんきの恋衣
 へるわとよとまて結すね
 むぶる傍たむしぬふ初言せ
 清の月乃はさるる化の際
 そむえ此絵の具はちたき
 せこの茶此湯乃りうはは熱
 かんちやふ武家と母さうまじ
 鹿毛ののよはらうあまのし
 ろう傍りらんつとを教ふの言
 ちんさへ熱うまうさとい味

美天、
 句龍、
 美天、
 句龍、
 美天、
 句龍、
 美天、
 句龍、

てつらぼん麻の河の浦の妻をいれて
句龍

交題自しつとよものうら
美天

小判うしは院落してはらきだ
句龍

いへともやうとよ
美天

合兵せき親任を頼りやめねど此
句龍

土百姓小名将り孫
美天

判とらむら家道制の物決
美天

出高神一河鉄の出
句龍

三ッ巴とらありのうまよ
句龍

燈台跡西風入爪てはるす
美天

岡細小庵夕をいれ月傳
美天

言み道角方乃ありとをい
美天

アれもらうこの室は安房は
美天

ちんふんかんうあふをいれ邪
美天

はきくあつこのはは茶を穿て
美天

阿れは様睡ハ跡をいれ点
美天

又きのし百更あらしは心
美天

あまもつ物定而入ふれ
美天

春興

ふきや花の
美天

美天

歳旦

積のりて春のよしのとち午のま

春風婦

龍母

歳暮

雨乃髪風子羽をみまゆをみ

人日

七色をみみさくさくはみり

亞龍

冬

きゆりてはつし聞かるとふけ

春興二章

さそきくまおらんときん大松を

白龍

みんはてしきまななぬ柳のま

人日

雷つきてはみまよおきもあつと

負舟

春興

階つきてはみまよおきもあつと

之より地の使をくをや小船時

淀川船中

あささひやまをみはくま川板

東海渡舟

たそきてはみまよおきもあつと

坊雨居

石白七翁さひきうはハのあ

歳旦

壽松園

瓜生

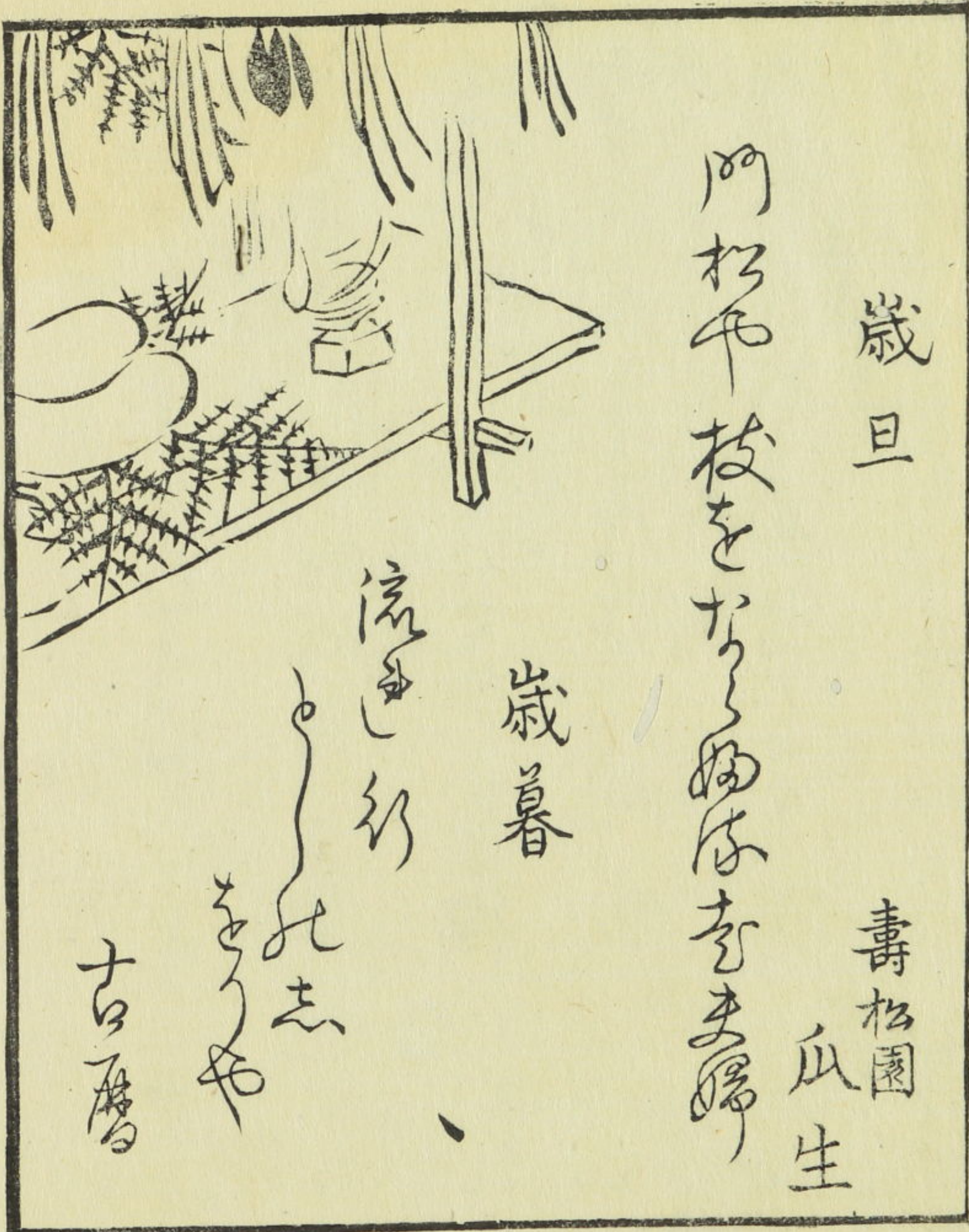
門松や枝をたらし物事をま帰

歳暮

流し行

とれ志
きうや

十貫



雞旦

平小代と我志んんめいのみ

十貫

志ん

と一頁の訓と師その流し

歳旦

不惑の事とて

唯や四外さる一筆事一の事

賀道

屠蘇の匂いも事さの流

白流

守歳

水而已然や七老を流除飲の皺

賀道

冬

魚ぬらふ古くろや生て網代も

三浦

春興

古くは伊保常の歌にや草賣

白花

新巻の尻持し春風お杖は

あこぎしーとてお留まひひとて

ふ取のくろきしーむきのおと

志く是もまじしとてお留まひひとて

初まや母を肩おさへ何そよの人

冬

風や一松の標より新はら

き御新田もさそ森ぬおん

巻はの奥の子物まや河縁け

そとせよ長老のまじしは成の衣

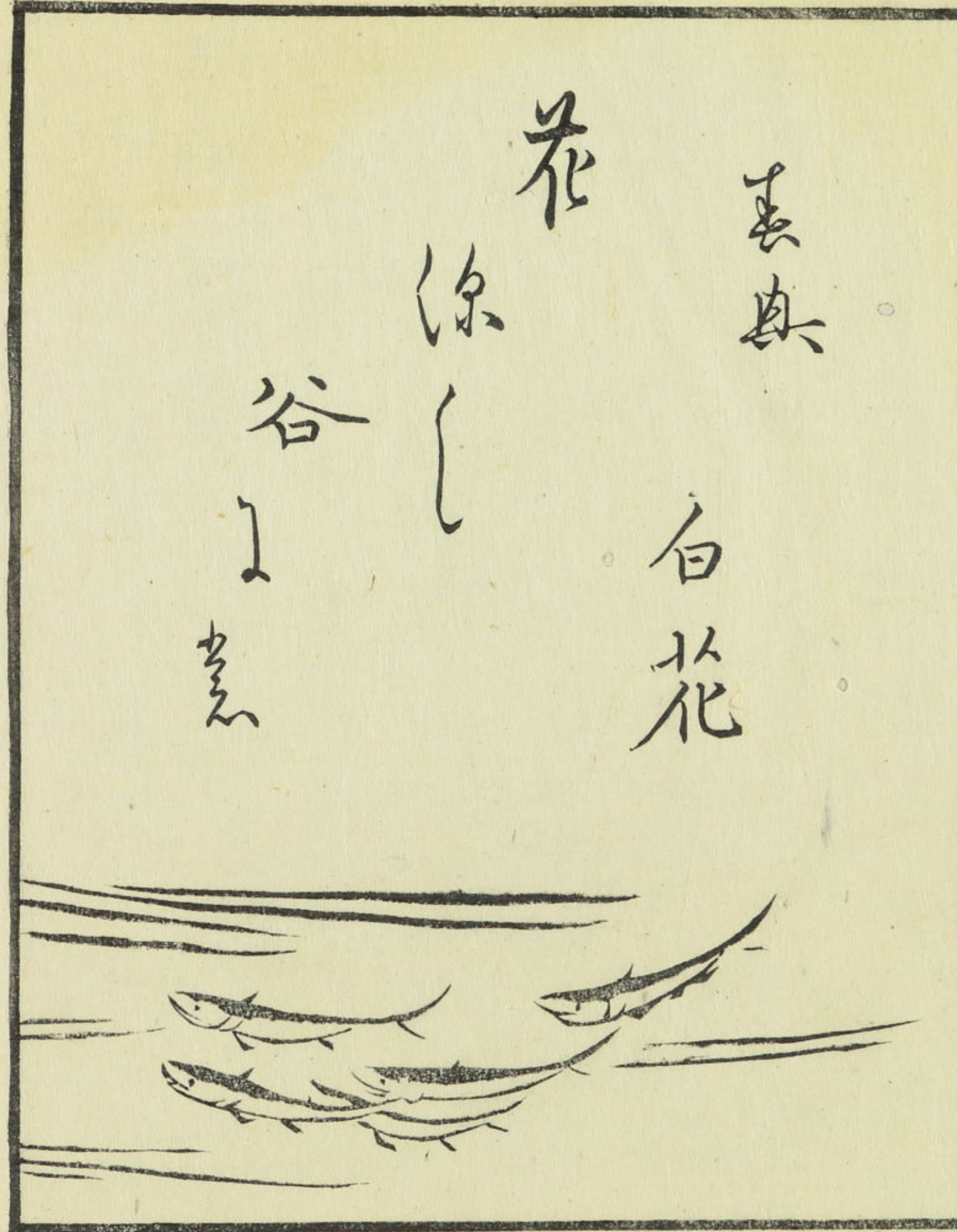
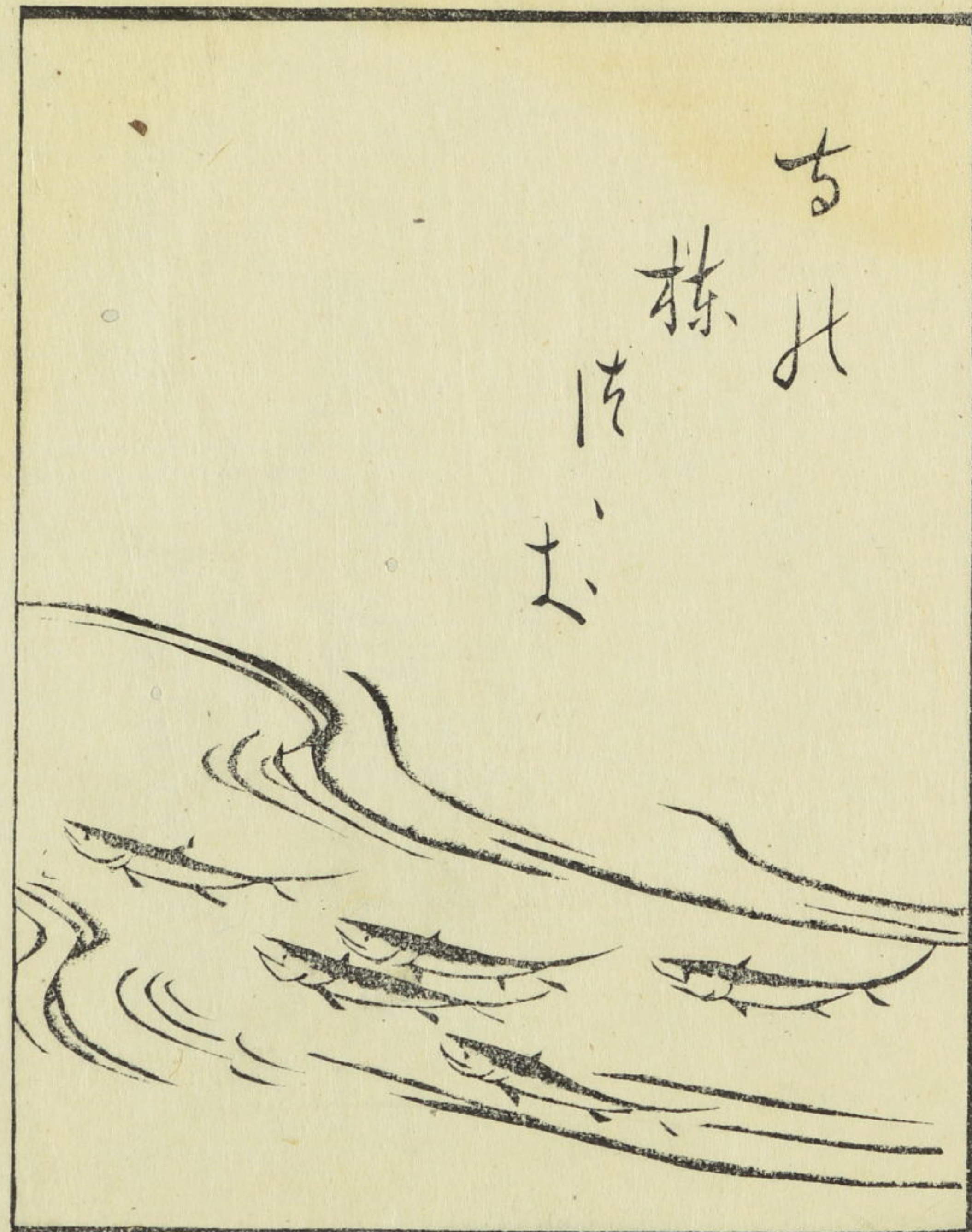
道標もこまの月のとてー急や

賣商人を何とておまらう宝舟

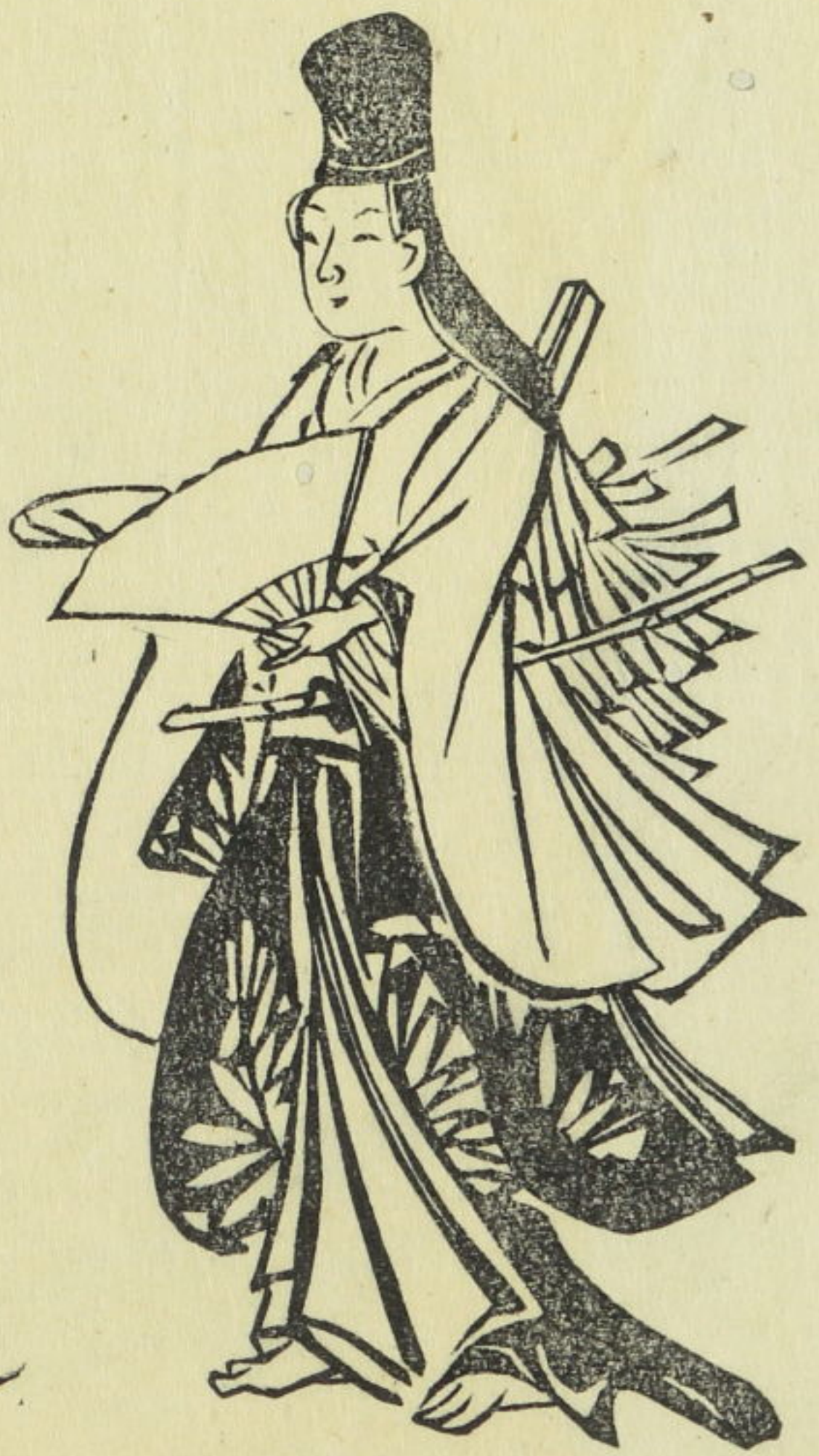
園もとてまじしはたおまら

人

人



三
十
五



喜多 白花
 御所 舞の舞
 山崎 子

喜多
 一日の終りのし 椀の志 雅楽女

仁和 常 遊も花のそ此上 白花

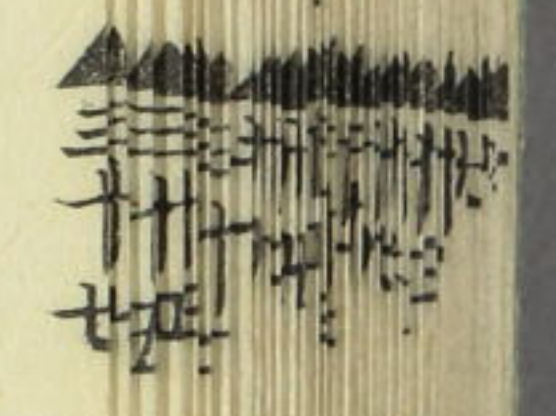
博をせふかむの美格を加う船 枝丈
 喜へ越強北舞をうは 富 家丈
 かこ倚う云侍斗 蒼屋をう 新母

せそく子八商人ふせよの法印 丑郎
 んめ

長町の横を短し 榎心

三十一

三十一



春興

春のついでにさし馬草や梅り和 我丈

水菜店のか根を及や梅よ

春のちおとなり川の夏生

雪平公母を信るは山

芒帆の風のぬるき一葉は

塩弁雲や糸由よるの

春野

うかりた人の摘まある

耕や春よ位くまは

人は

走も物しつる揺りのり

廿日正月

骨をよるもや靴のを

を

相儀一傾茶町のま

年内春

ふゆ一しおりのま



三十一

人日

若さし〜のまじりきほりぬ露

環雄

十日

満きことと名ぬおとさる南風吹雪

十一日

梅うまや増井を吹く京の人

跡の女此おきいよ掛や坂の梅

多きゆ斗家の所りいあまたす

葉のむや〜川よあ〜おまを

夜さ〜ゆ里の所坊ゆ終の考

冬

美時節の積り如儀や寒上戸

川邊と一尺高ふ〜りう甫

十二日

ふ河のあ〜りうけ寒船

年内立春

五日ぬれ東風先戦くはを流

十三日

海を流る〜の〜のかい大さずは

三十一

春興

白雲や映る流し紙屋川

環雄

條川やまれし一艘と浮れ梅

雪や垣根よまじり小短冊

夜更けとならぬも造化のまじり

きらきらと狭下新水のぬるまじり

冬

破爪のしとど箱入のあまら

ひらひらと舞る雪は後の地獄に

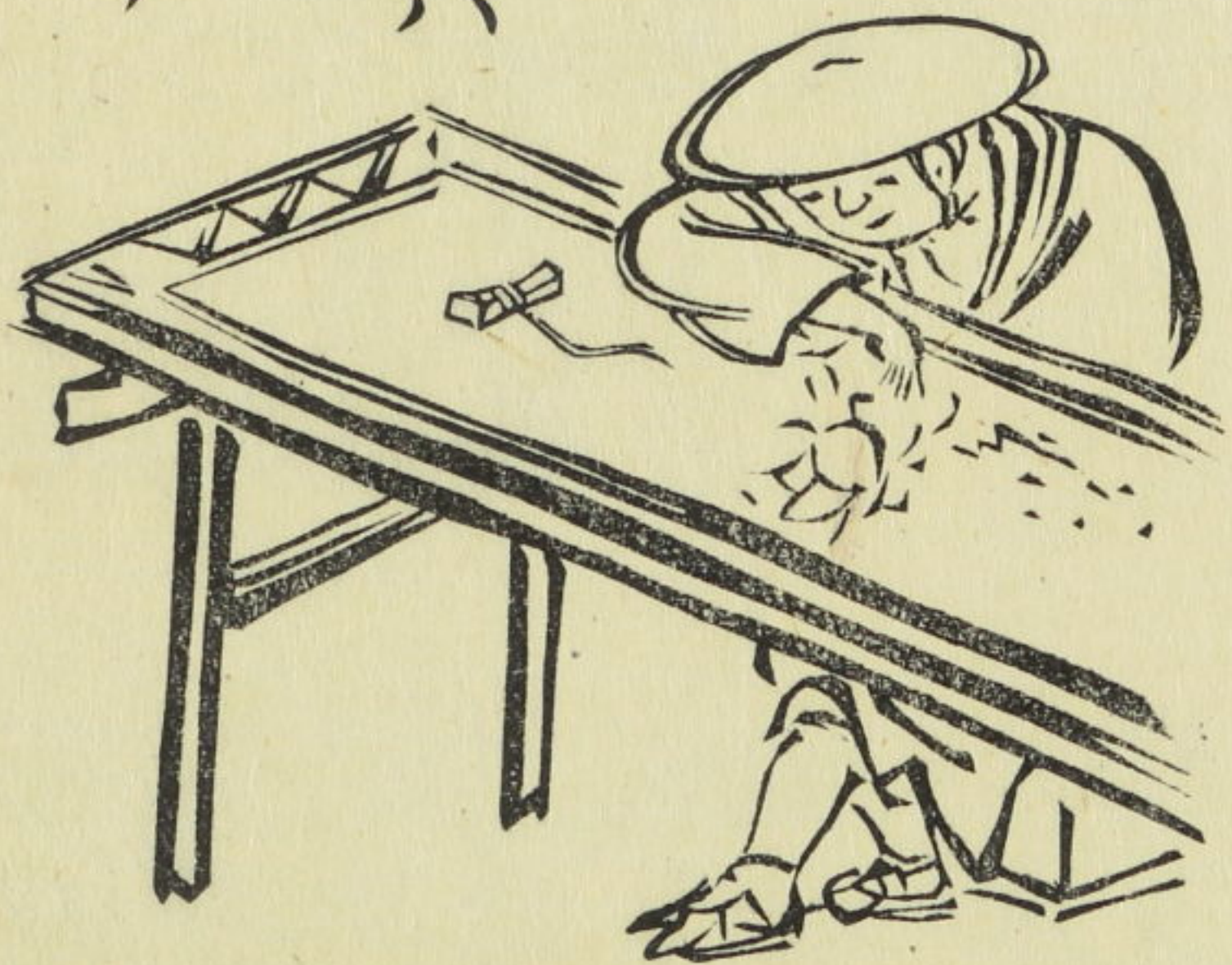
荒陵山小

かき

繡ふととハ

凡まじり

いとけ丸



環雄

三十九

歌仙

ゆきを危の山よりしよの
或るいともさうく

押親へ救うとすの根問う存
南小芽とくし芳しき枝
向ふ十千細ユ上り此命揚を
使の顔小志れし吉ささぬ
此えう丹にふれを思ひま
なんの茶しきふらき新茶香
あん才子哉桂のまて砂あふし
きしは危敷 ちたのめさく

環雄
句龍
杜例
環雄
楠芽
杜海
環雄
楠芽

おやらうの遊り兵をよこかちよと
部屋位よの恋を憐む
ほろろとくさくさくしは雨ん
小山雲扇も水うら月
下屋変は強し見由秋亭阿侍
さあさへあを医者しうひもく
千字文大高檀子とりらへん
内裏の餅う百里かど行
花見高玉浦のあをこのなまらもの
室の園小藤取るくとも

杜海
環雄
楠芽
杜海
環雄
楠芽
杜海
環雄
楠芽
杜海

四十一
九

四十五

喜ぶ

苗代中を柄の稽しはあゝと

虫都一平まゝ搦とまゝのゆえ舟

初とたれ中し一画と六考ると

多知城の道尾を一とこの友

き

昔のりやうきやうきとよみねと

き

名後のねがよとてはあゝと

木虎

喜ぶ

木虎

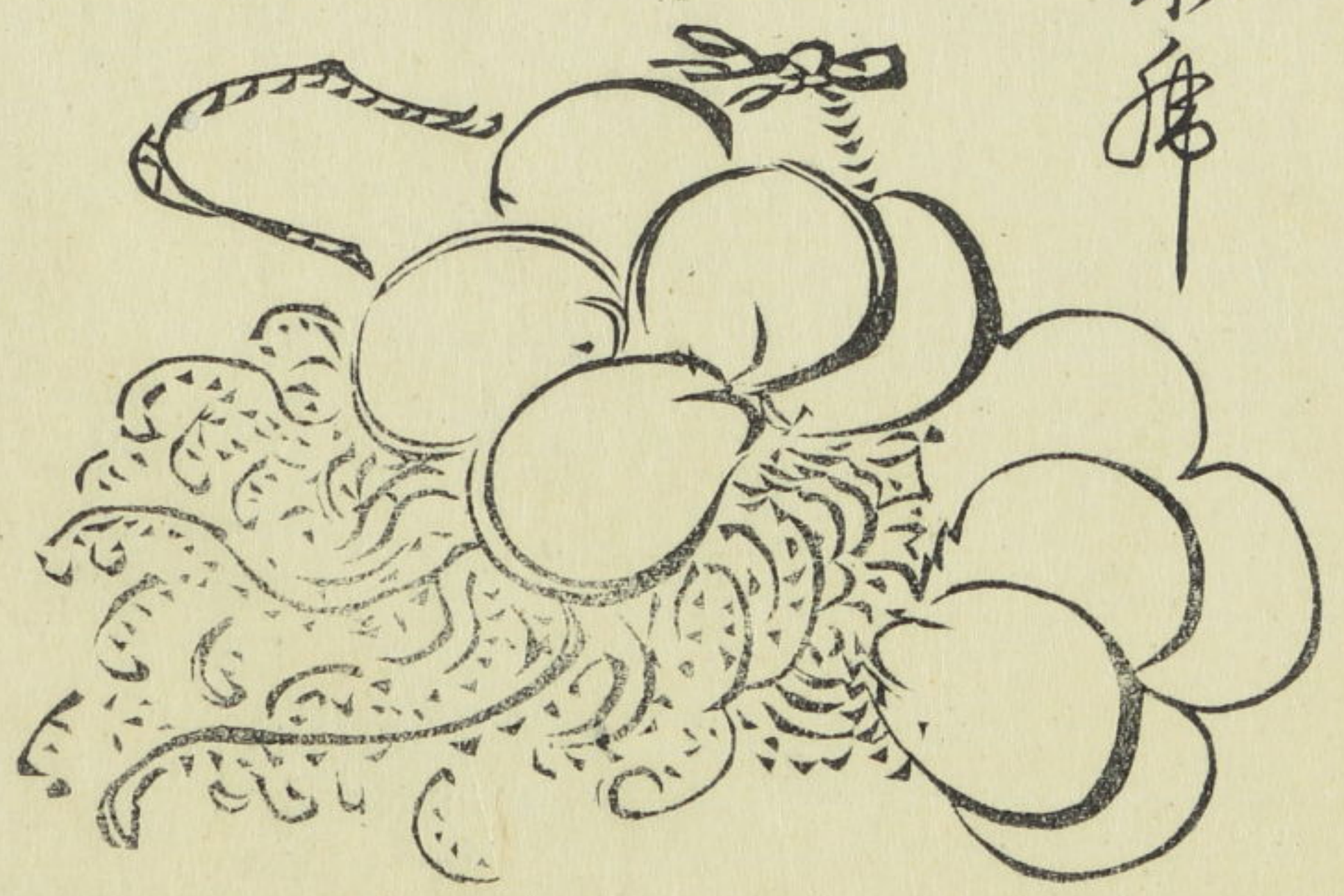
米おまの

かに

ハ

ハ

ハ



四十五

三十一

春興

賣のてきら賞のこしなふけりな川 煉花

ら吹や扇子のまき小まなちて

梅咲や十手振ふお梅阿け

梅さの中縁まをのまお新

く免はまや扇まうままあふ あなれと

さ記のまい筆しつりま梅えん

梅や丸

梅まや窓くく梅したまをの火

一里二里梅れまはし梅路は

扇くののりまはしむりりまを梅

梅咲や塵一本のまをま

花とのやま梅持を梅とて

歳暮

梅梅やおまは梅まぬ人

四十四

四十一

四の節に人を思ふ

ねんころを礼者は道にまきの節

郊花

人日

七草や己の位せうくあきとて

心め

まのつめの胸のきまうや梅吹

又

る姓よきさつう子きほせ梅吹

其真

菜のよや新のりあ破道壁

夜行の歌

更紗や梅のありにかさをなと

柳のよきまきのつれは

あまよき花の紋は柳のよき

あき

徒更まをきとて道に牡丹

き中

流の水風ふへうきききり菊

せらふん

あまよきあき鬼の足乾

四十二

喜望

夢や涙りうめは自在空 明峰

雨玉や亀おはせく海池の梅

光陰そよほし一書ぬの大井川

梅の香残さく群鳥や南うけ

み

まをりやうめはのちく

やうめおとす

喜望

標うきや八まの汐浜を是夜鬼 明峰

名木へ名を啼や喜の鳥

五はをた風とさうわいのわ

春凩一は子れ浦のきをさる

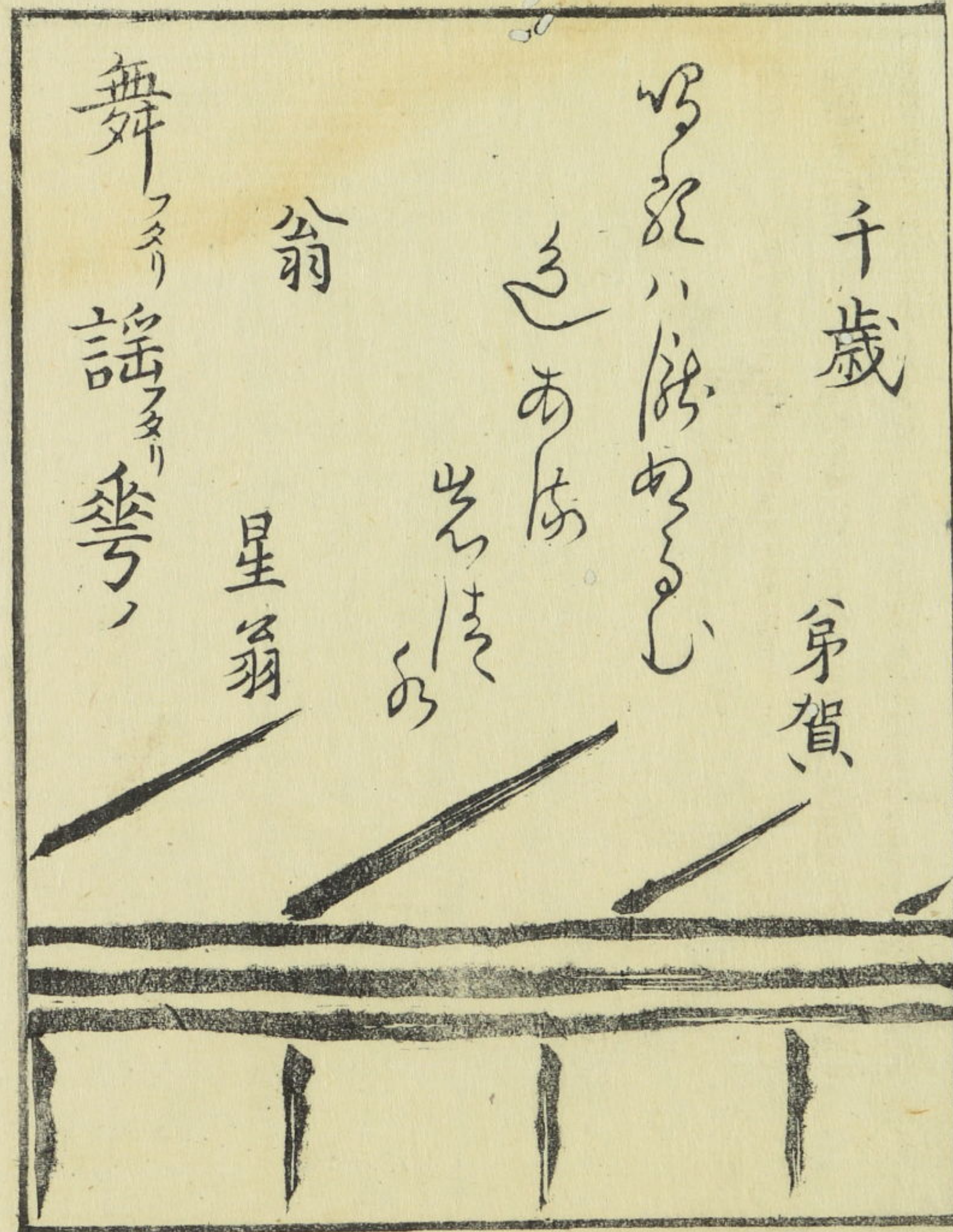
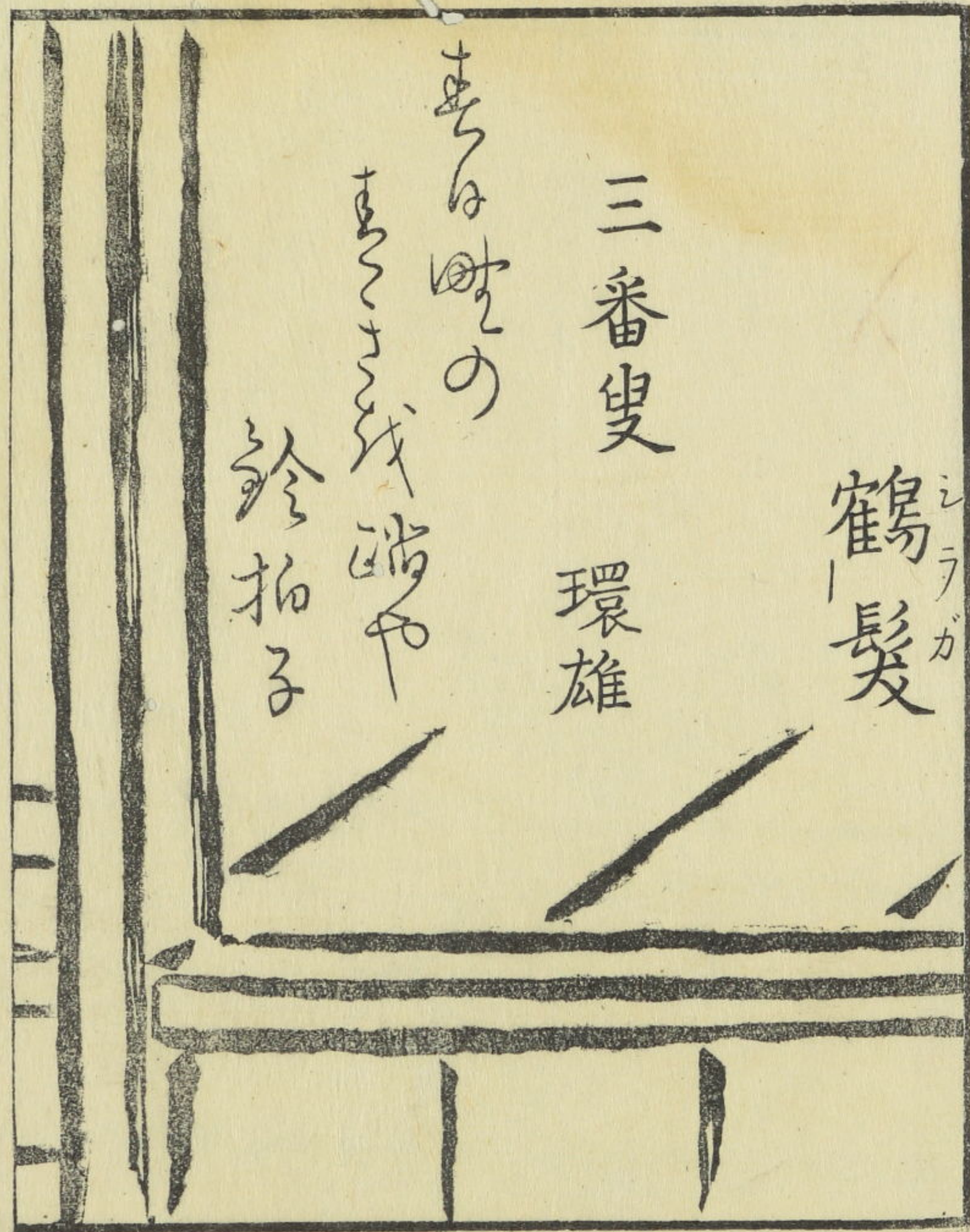
よのちらけ薙はさうぬ微の形

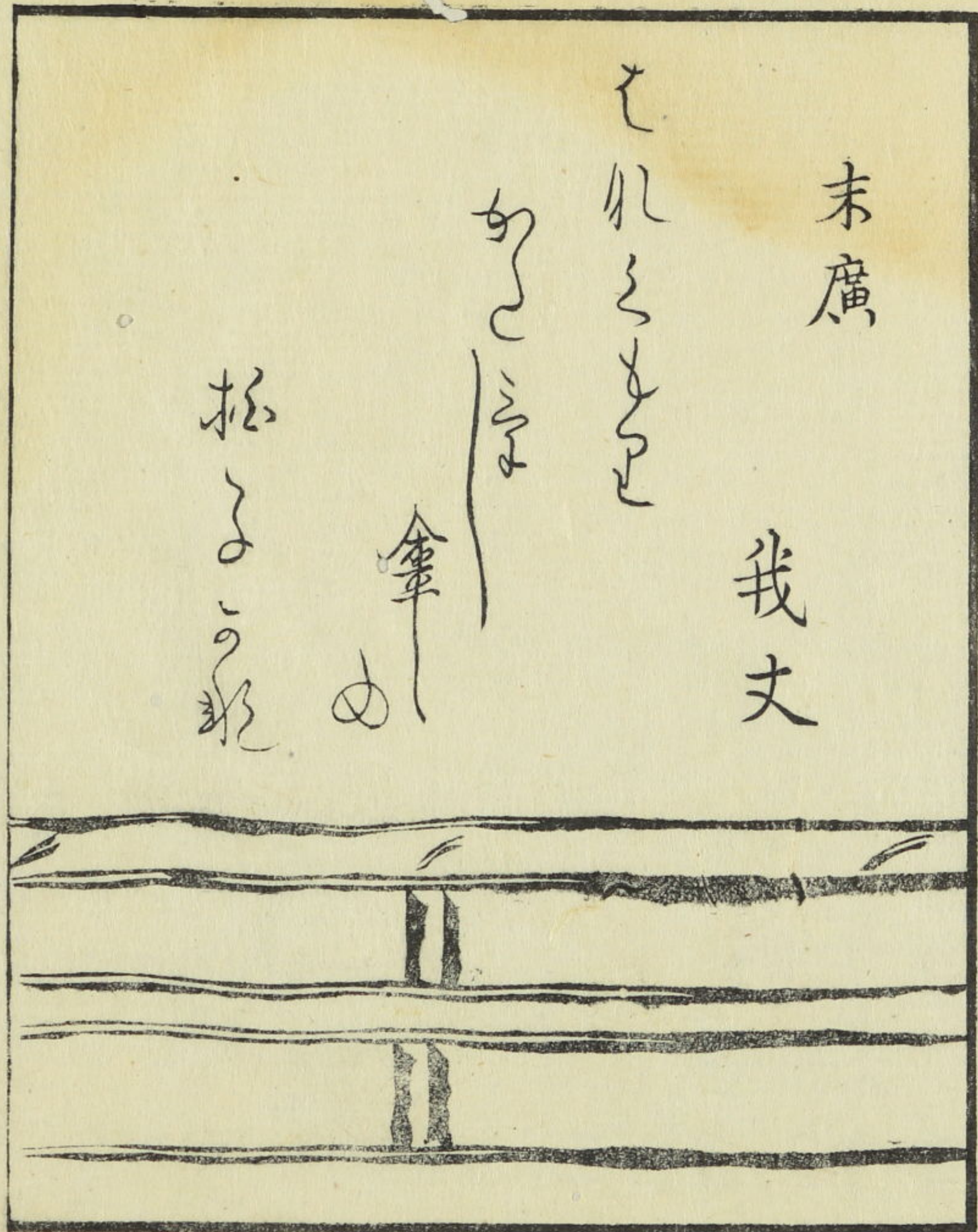
あ

と平く聖也河れのちり河の音

大尾

私をとりや長門をあたう境





末廣

我丈

それとて

かこ

傘

松子

ゆ



高砂

蝶宇

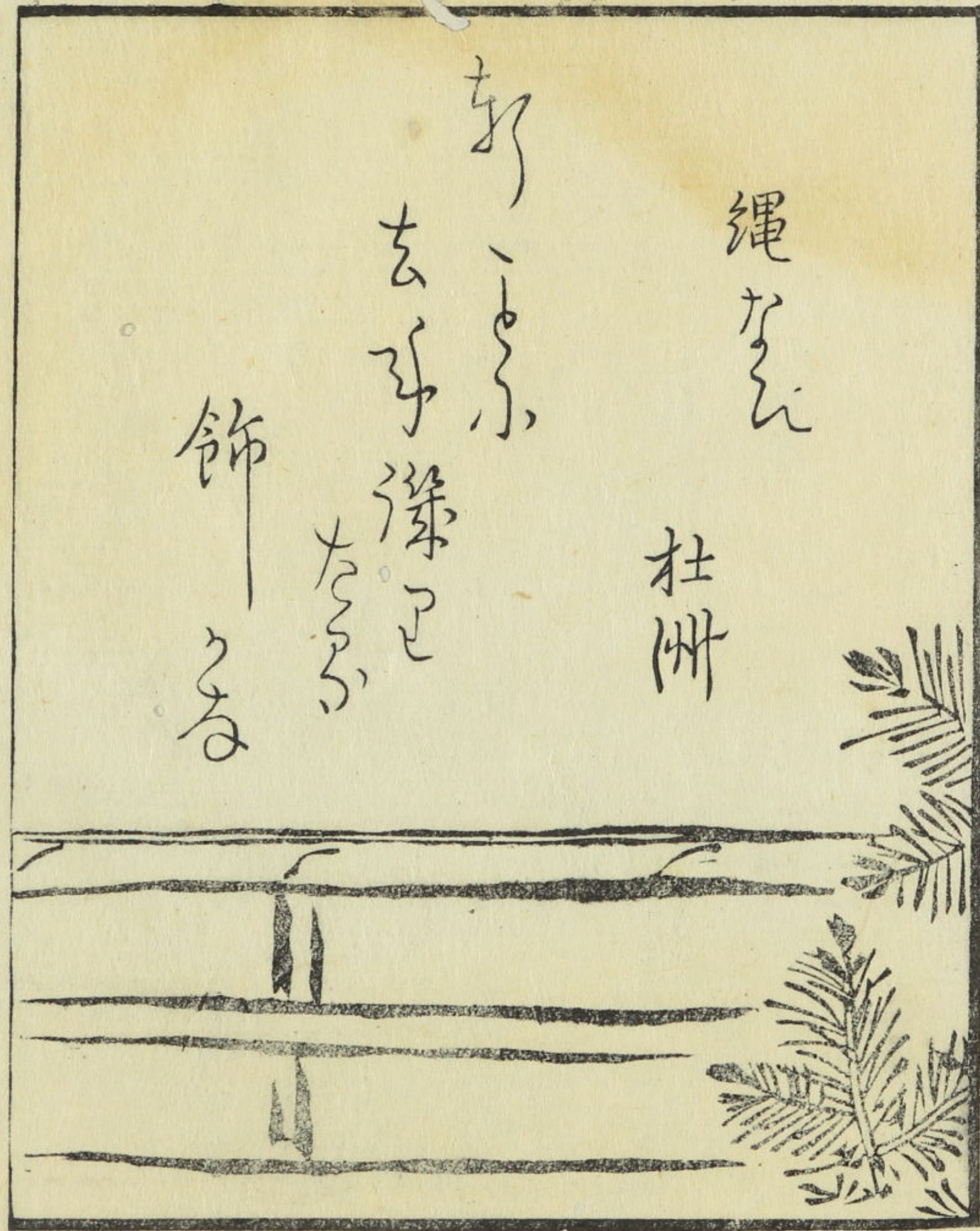
相生

海

乃

か

あ



繩なま

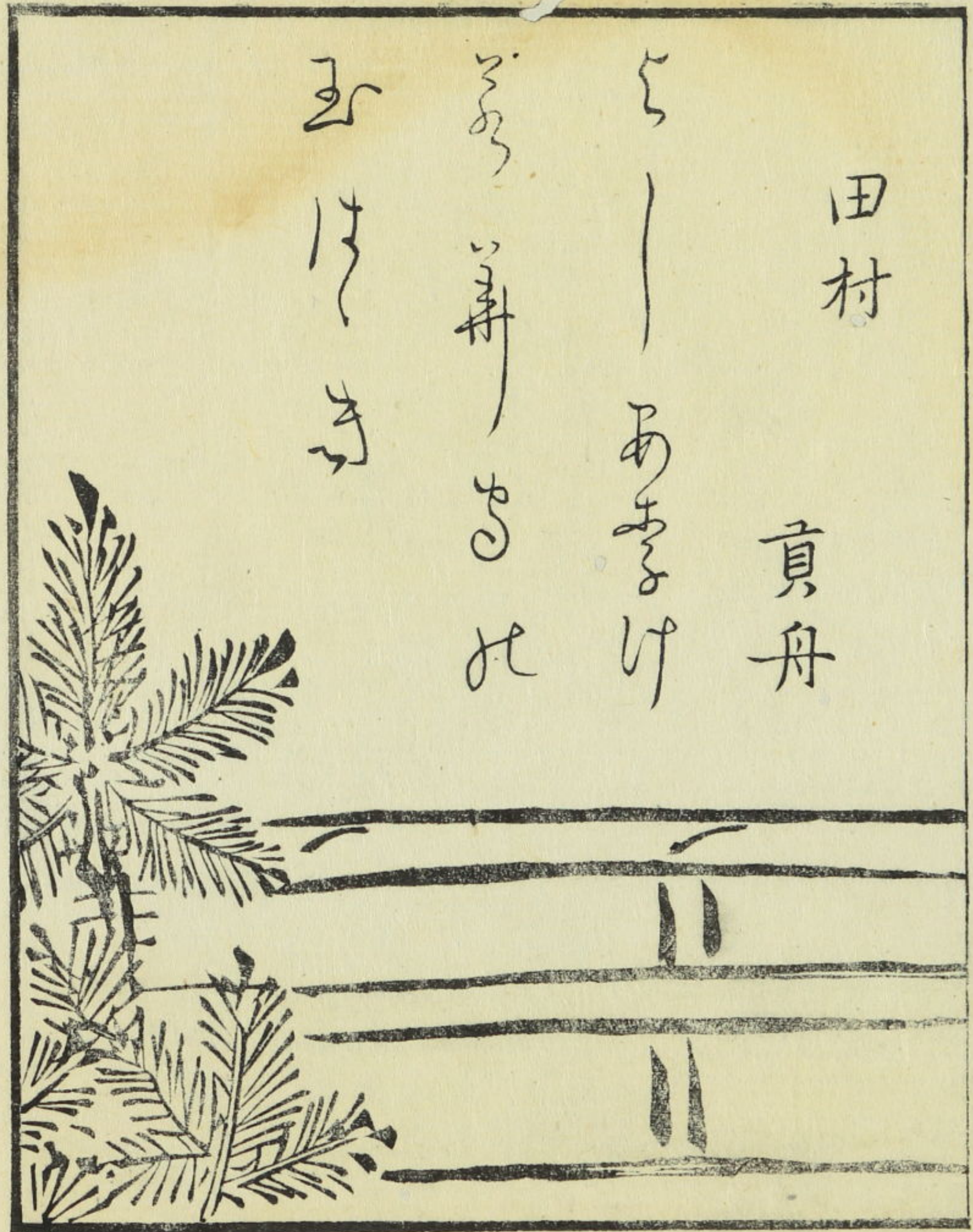
杜州

新しん系けい

去こ年ねん豫よ己じ

たふ

飾しるる



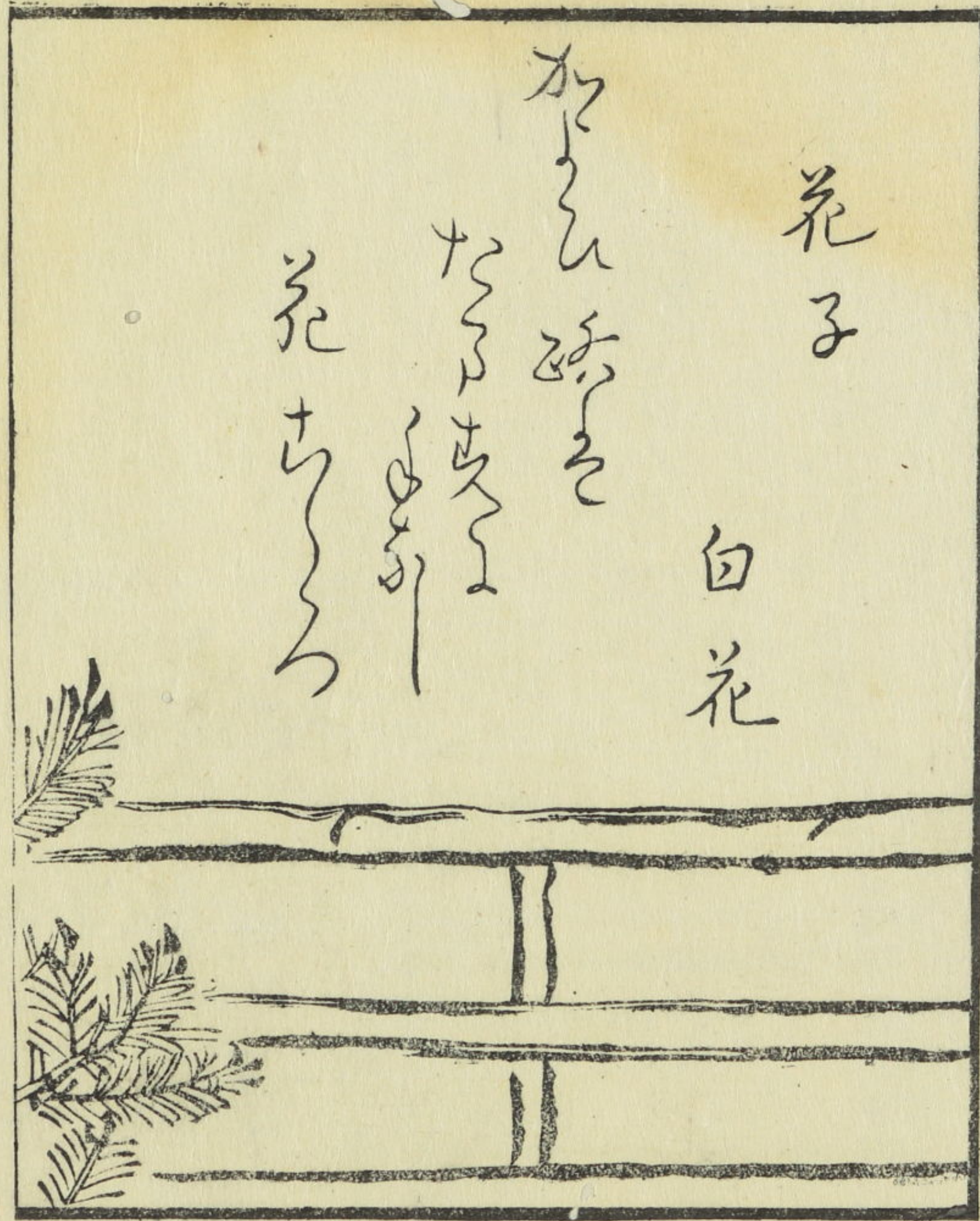
田村

貢舟

とーあきけ

るる新しんささ此こ

玉たまははきき



花子

白花

かよひ

たより

あし

花



木虎

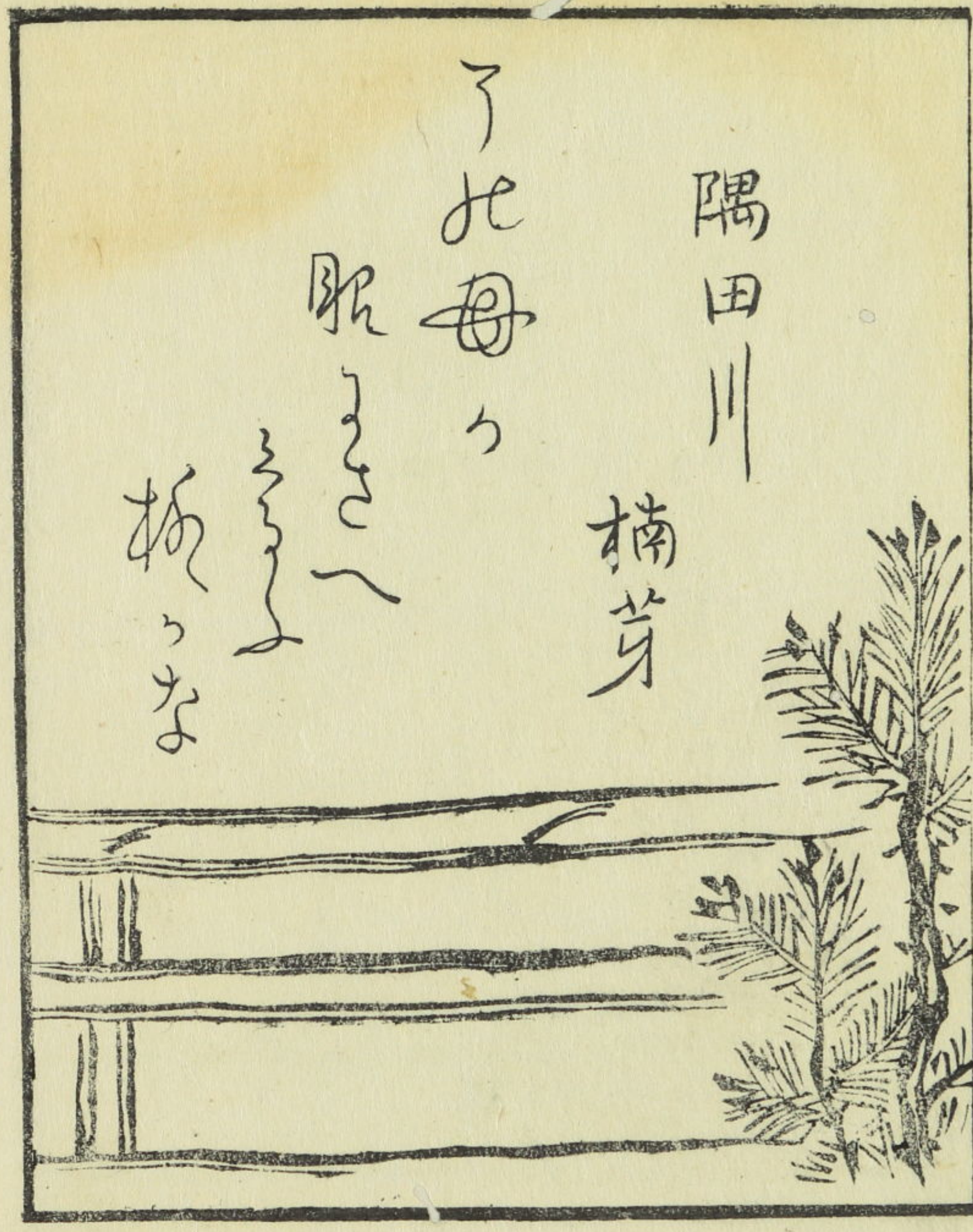
湯谷

かよひ

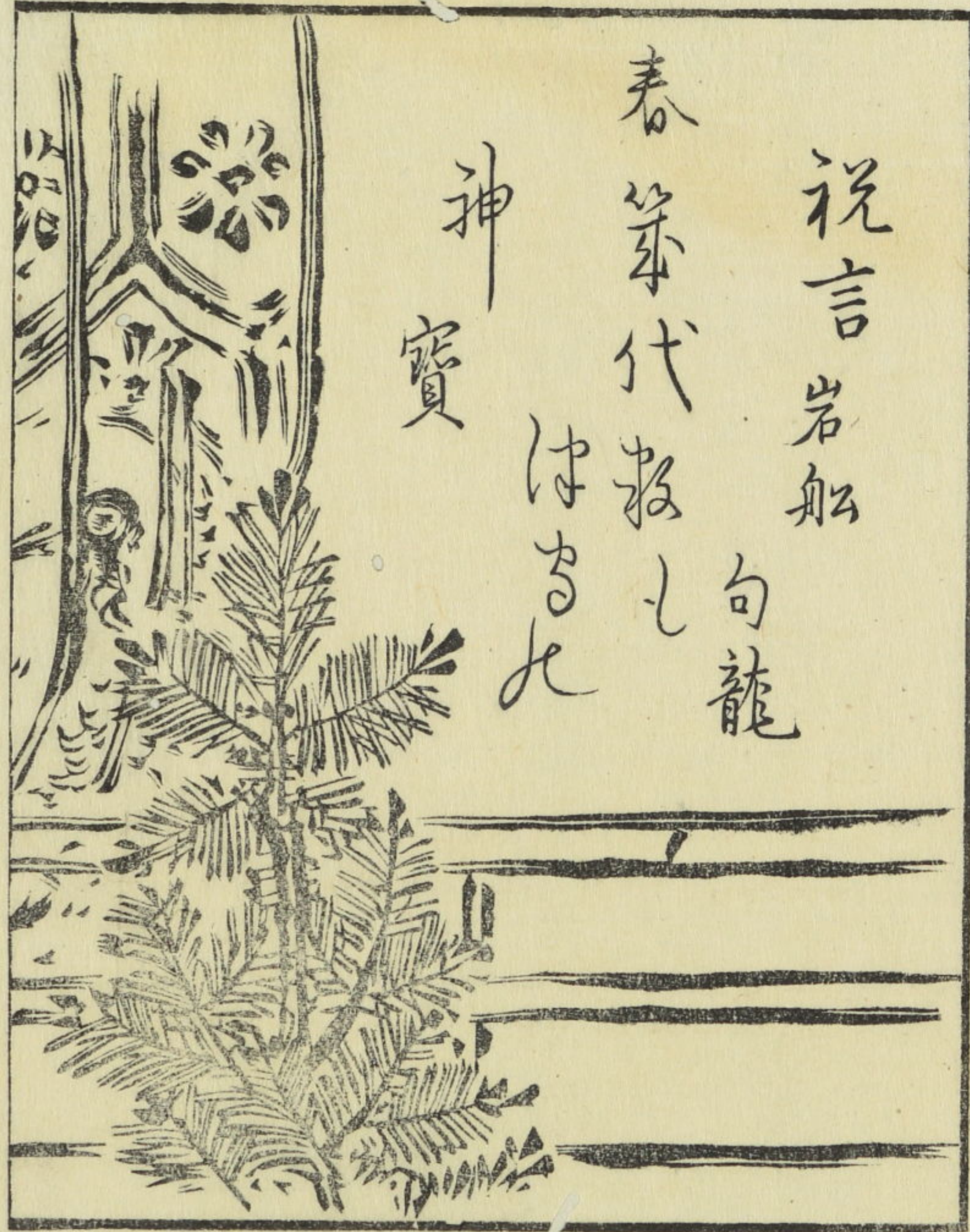
あし

花

四十九



五十九



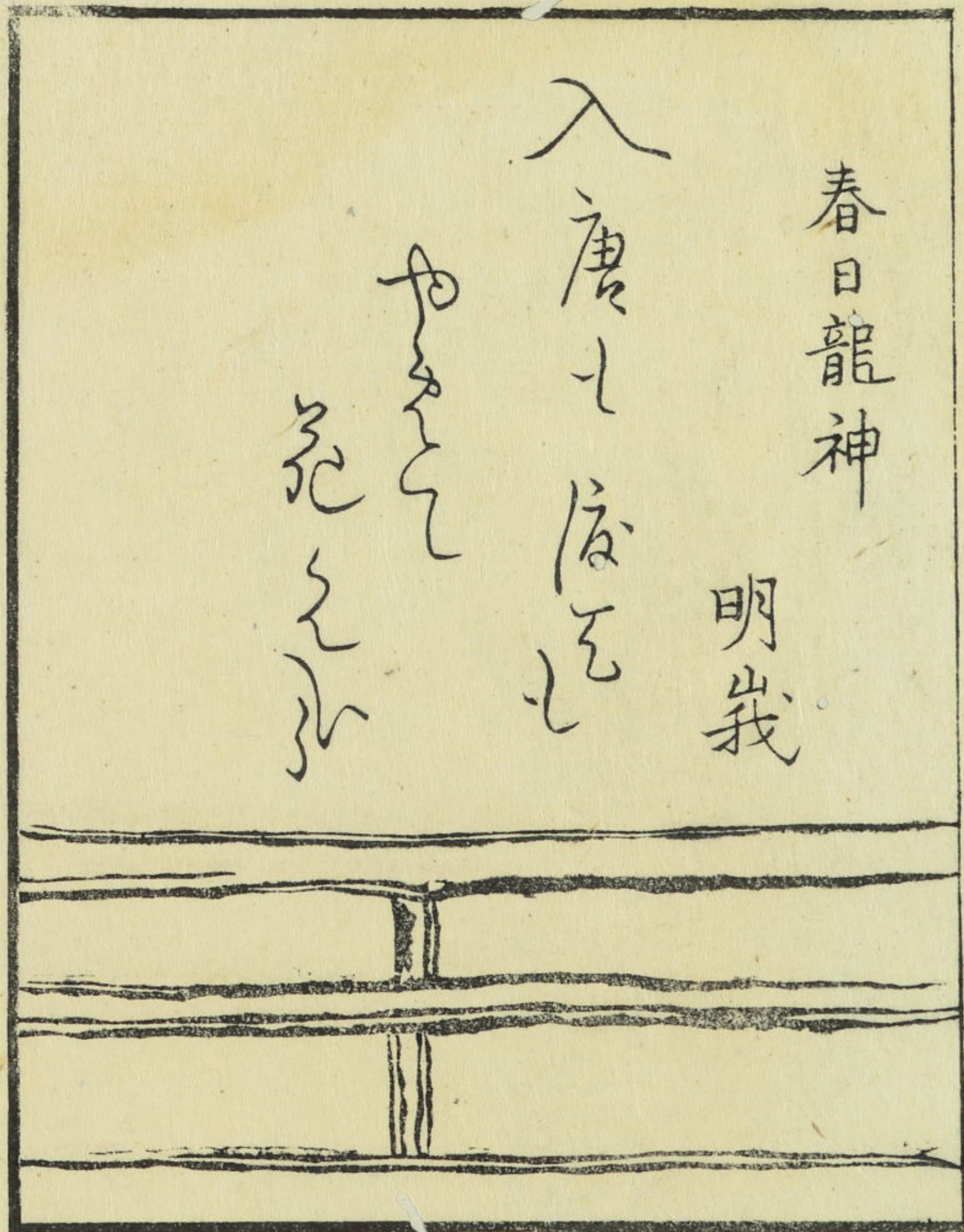
祝言 岩船

句龍

春築代救

神寶

神寶



春日龍神

明我

入唐

如

記

五十五

案日一

張つて、まの丸をく

初梅首

採花

忠臣

いとまじき織姫よ、おれをいそぐ

長巻

雪もや、おぼろぎて掃く

扇 送

白花

哥儂 春寒

ちやうは梅小丁、啼くをきくを

句龍

行違ふまを休む、此も東風

郊花

一由し早ふふと、おををいそぐ

煉花

雲の与ふ小葉、かくのし

度光

吾れ氣をきく、おを窓縁より

明峨

あ、後よく、おをさふ草を

西龍

ま、あ、おをさふ、おを乃ほり

蝶宇

屏風をく、おをいそぐ

木虎

家なつら十人並ぶ由らぬとハ
婦を造りし和歌祈りて
既及の折ふらりしやれとて
あやるとも五月小よみ
砂時斗きまじく志やんと居し
真つわらうまといふと
むさんやれ多井の丹の雨り元
ふんを狐れきくをたうい
花の奥玉あ守し腰折れ
布の迹きりけきききき

我丈
杜洲
環雄
白花
さん
龍母
乙夏
弟賀
美天
白嵐

春^{ナク}うせよ又欺きしてこれよふ
傾城賞此をふまじり
きぬくの余ふれり家雷の影
きりころころハ響き此より
流石庄屋ちう川と出たうも
角行燈の角とまべつ
らよの月笈根の海此鳴る
流氷東山子とまじり
市月傳の交仙のやよ小鳥の糞
先ハ漬きとと兼乃碑

郊花
疎花
度光
明我
巫龍
我丈
木虎
杜洲
楠芽

五十一

大男案内者よきありはたると
 乙夏 白花
 一万余騎り冷酒の碎
 乙夏
 石小奇く妙く此琴の音
 句嵐
 蒲野の多きを浦富りよし
 美天
 棚の夏醒く飲もふ茶を
 身賀
 うま〜笑〜こおとのほ〜を
 龍母
 あり〜は〜花〜の〜福生果
 蝶宇
 益〜く〜ふ千壽萬歳
 執筆
 園中〜と景
 星翁
 故へ〜するを清〜
 志のま〜

僧^モ 隱^{ヒカ} 骨^{ヒツ} 限^{リミ} 月^{ツキ} 蝶^{テフ} 宇^ウ
廿日
 嗟^ア 梅^{ウメ} 津^ツ 儒^{ニホ} 者^{シヤ} 白^{シラ} 花^{ハナ}
春真
 新^{ニホ} 舊^{コソ} 索^{ナヒ} 交^{マヒ} 飾^{カゼ}
年内立春
 橙^{ダイダイ} 寶^{ホウ} 引^{ヒキ} 親^{オヤ} 玉^{タマ} 我^{ワレ} 丈^{シヤ}
歳旦
 風^{カゼ} 柳^{ヤナギ} 帶^{オビ} 歡^{ウレシ} 喜^{ヨシ}
春真

五十五

五十一

春興

栽^テ市^ニ弄^ス梅^一曆^ヲ 煉花

生^ル歲^ヲ汗^ツ鉾^ノ滴^ル 三甫

囉^キ言^ニ拌^ス爆^ト竹^ド 句龍

言はよきなり

梅^ニ嗅^ク高^一臺^ノ頌^ル 上ノ吟

唯^テ多^ク香^クを^シ芳^ク一^ニ乃^チ憂^ム 上ノ吟

出^ルて^シん^レれ^ルは^レた^チ娘^や室^の梅 ^{星翁}

春興一聯 六言

緑^ニ浮^レ来^ル 柳^{クル}陌^ワ

紅^ニ染^ツ戀^{コイ} 花^{コイ}風^{ヤミ}

病源論曰女欽近男不遂而煩謂之花風
亦云柳陌花風共雜也如綠紅作當季

世間をこれと

お意^ハの^ハ新^レし^ハ愛^トと^シ此^レ林^ノを^シ
少^ク茶^ヲを^シ古^ク心^ヲを^シ出^ルる^ハう^シ染^ルる^ハな^ら
井^ノを^シ掘^リて^シ炊^クや^ハ心^ノの^ハ有^ルる^ハな^ら

右 星翁

物日

あこ喜のこころ二首はりけしち

菊苗

梅の枝を片もみりて此も獨り

二鷗

春真 一日庵

一畑ささくらしとくつ 葎蕨

南飛

梅

梅咲てこんと流のし流る

楚岡

冬日野度吟

茶凌や流へてくすあ

寒白

雪

振おしやけ大坂の雪えは

李棠

春真

寺中くし詠をぬ梅の文る

烏掌

臘月雪 四松く出

五流齋

その業を恥へし 雪と炭

女媒

羊内 立春 在遠及

とれらち石二の初りとこの峯

万翁

春真

温る水と梅うま少吹き肌へは

馬泉

そのは

崖山家てなまはれしとく大二十日

張吾

其の雪

梅枝を片雪の肌をわきまはる

杉丸

その帆

無造作な雪と斗ふとく此市

一笛

その所

朝の雪子ハまをしををりし

十南齋

春興

春水何の如き山一川一壑さし

有隣改

延年

さび

忘るゝいかになほの跡をい

棋所

棋北

を父を如く

と仰けりや舞むるふと此夏書吹

友志

晩年

之の友を伸よけりと一守す

藍く舎

如鈎

と心か

梅枝よ羽之の鳥の園之に

九皋堂

舞巾

臘腹を燕ふ如く洗ふ船をうなく

何をさしめぬ此頃をう徳俵と

冲之

春興

明上流今梅葉も一葉柳

右功

早春禁歩

梅枝よこ人なれぬ日私に

九菴堂

馬常

春詠

む小隣は隣をゆるし春の雨

撰三田

素牛

春興

白梅や何れ晴喜小鳥をう

梅之室

因菴

春興

春う花うりやうむ春北花の雪

兔杖

春興

いささの春をこけし梅山松

君竹

探題 蝶見

あゝあや 中をとはらう 此中 継 一草舎

守歳

果て主名の若くおきや 大塚日 呂城

喜鳥

子頂此作り 繁う於根ふと 羽幸

喜鳥

梅うきや 枝の内ふ 針斗昆布 泉明

喜鳥

ふきや ちろく玉の削りし 層 青螺

枝元

夕あや ちろく玉の削りし 層 求駟齋

正朔

吉例をこころさるや 也 田可此 初旦 緑樹楼 蟬齋

歳暮

山の端くわ 家守をりし 大三十日

歳旦

家守をりし ちろく玉の削りし 層 冬頻

年尾

中此あや ちろく玉の削りし 層

喜鳥

美といふ名をさるや ちろく玉の削りし 層 春帆堂 朶秀

喜鳥

飯指のあや ちろく玉の削りし 層 西流

五十九

年屍市中の繁華をうきよ
回舟の燈籠し星花の海を川 事天

春興
寺より尾花柳を長きこもの影 松卦

花も実もあつそそとくも小倉山 射候

冬の所
室あすや鎖柱詠し梅と 吳縞

早春
既よ晴し媚んとすも梅の心 天真菴

年内立春
を江の中懐ふを後福赤州 蘭石

元旦

一冬を人魚し又雑煮は 櫻坊

廿日二月
骨髄の雨ふりぬけ牡丹の芽 賛夕

冬
湖ふ塵う籠り出は暮るる 玉東

冬
雪中賣小き流く炭小石 政花

臘十二日稱雪
冬此雪をとせ卯のむかきとら 星翁

急居
こそうやの蕨のふとこらふ

六十一

春咏

摘ゆや笠より山のたぐひうそ
片うらや僧も小うこをゆれんを

楠芽

題采

日いそ〜 吹ぬく雲の鏡屑
迹水の叫くそと成てたり
せらふんや肉うし鬼の亡たふ

うらうきそのはまの解とそめうそ
名うはまをうらうし其まのふたふ
うらやほううままをまうやうら

十喜ふ小ま〜 せつれ山崩き 望

夕干

遙伸ハ二人の舟とこ白舟

巴流

帆を〜 さら〜 ぬ〜 ち〜 ち〜 ち〜

蛤小ほ〜 惟しふ〜 つ〜

鳳字

硯の海と夕干しと

志ほ〜 と〜 ち〜 ち〜 ち〜

棘花

伸と遊〜 ち〜 ち〜 ち〜

飛日

空と〜 ち〜 ち〜 ち〜

白花

年内立春

継あま

咸壹

心しはまらむの

うす

のしん

立春在臘

吹簫赤湯を

長笛

清しきの暮

春興

去年の白小つ足

遅し
楳あ

今

歳旦

夏赤

この釣糸は信の葉か

歳暮

全

秋博國性根の

瀬戸や海を

梅

晉尾

去年四月のちく一葉と花
ふりてをてをてをてをてを
てははてはてはてはてはて
ふりてをてをてをてをてを
てははてはてはてはてはて

むらぬ鳥一萬倍たわこをち

白花

散れよのなまきりてはうを

句籠

厚霧鼻たうらうの芥蟲

白花

をし流帆舟小風のや何りて

よあふと心はほらちね月の弓

はらお海を小初と文待り

句籠



國扇としはすしらすを流す影を

舞子回士のまねくらうこそ

はこ十二むごの嫁入も美人を

き院飾の埃り何ともし

取わん其まきさこそをまか

美栄樂あまきんはめい

句誌

白花

句誌

白冠

大尾

又志をきお母んは

はらち焼き

女是菴

南都連中



六十四

歳旦

昔年正月後成古梅園

系物のまじり同く内梅の香 鏡溪

安らおの精し 柳子

酌る玉水何如も心 芳樹

二

芳樹

福縁寿しと物と向し 芳樹

南のふりし七叶 鏡溪

古きとせし女は留活縁 柳子

六十四

六十五

三

汲花亭

蓬萊神代の室はくし哉 柳子

吟うまうゑるゝ肥 芳樹

大黒村は花の香と深きて 鶴溪

春遊

福のぬけやうしの花頂山 柳子

一白を折る瀧ひし鏡江 鶴溪

連江のこゝろや海の子 芳樹

歳旦

香を授け地まう包井梅の香 花律

男ハ子れりあそまわし取

今捨て措けし田鼠新あそぶ

年梢

楽虫鳴きしと此友を

春興

あましほゆるしと年あけを

六十六

六十九

歳旦

萬歳とほし長生や所乃和 隨馬

志か

かけ取やまの住まきぬる此迄

ま喜ま喜

花二千の葉のふりや牡丹

ま喜ま喜

出筆かたりせぬ此新地り番

歳旦

又馴るゝなれ珍し福壽州 春江

名をむ月あへる貴し物子茶 三冬

長生此初音位や 店美葉 玉戸

ま喜ま喜

園子を静小せはし寺なと 玉戸

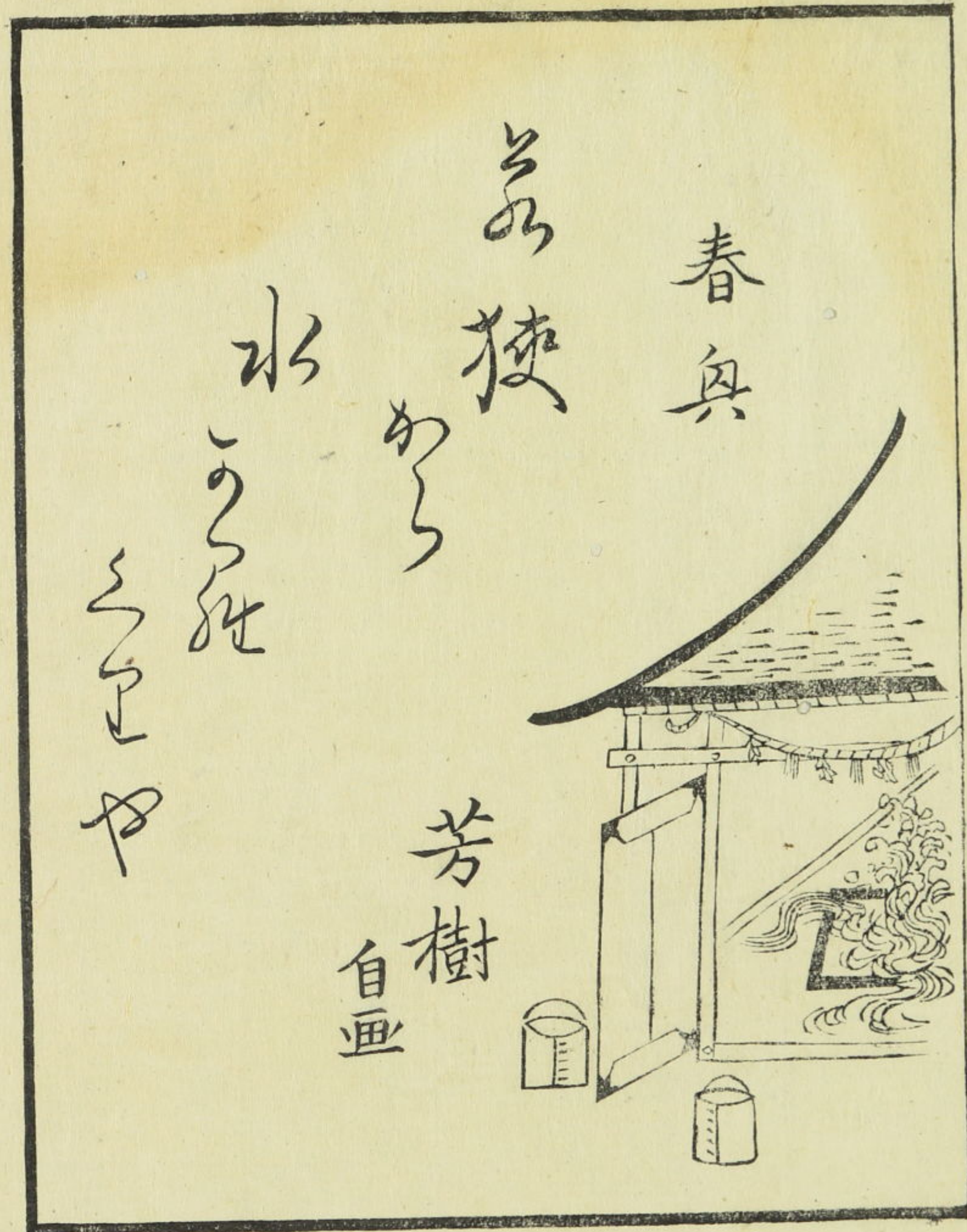
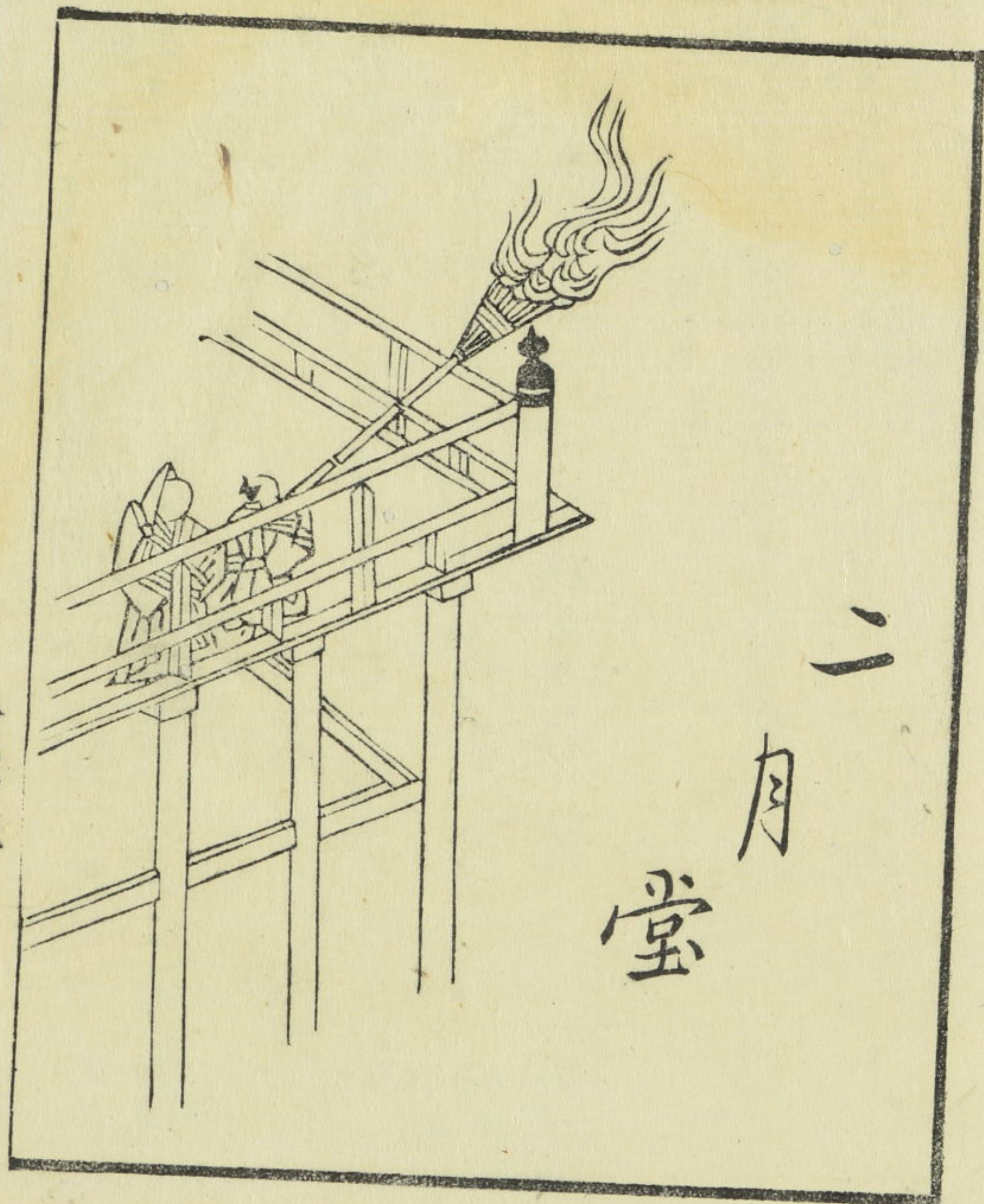
若人の和布刈此編そ一衣皮 三冬

号乃春我し冥の戸何を道 喜江

年内ま喜

かそそれ喜致古今乃仮名席山 三冬

六十九



きまの珍肴を極をとて

脊へ送る手紙に「此書使 芳樹

舟中の書一冊の
なをみるは

良おもて天窓の上北窓へは

節ふ仕嘉例喜日社系

手紙や燈籠の教豆の教

手紙を

少うは蓋と伝へて妻の風

歌集やい流りの筆も明馬

喜典

海原舟中を記す小風巾 誓溪

はのむ乃日傍はもはさくは

借くさくは妻は口をさすの由

冬

ハ才の能書や室に梅の森

ぬきう火のたき思はれきん

六十九

柳子

人日

ふ髪此人をけり乃根芥山 柳子

春奥

りを抱てうらまほ竹葉や梅よ

畦さやの人の糸屑はくじし

身内まき

似と顔そきつや道の二子山

夜中雪

喜色きりてこきふ

柳子

たうかおやるうま(うま) 炭



柳子

歳旦

明け星やほろくく白きと梅の春

梅牙

餘寒

ふとと氷へ梅の香に春をきか

春雨

をくさの羽小羽に飾る春の雨

歳旦

草花もや小槌くくおこけり

燕賀

春興

鳴川やむじろ男は春をきか

歳旦

雪解る春の水もくくおこけり

錦江

一端を暖くくおこけり

時習

年梢

かきとあやほろくくおこけり

時習

をくも梅掃り花散りつとく

錦江

立春

組まねやとびの枝炭くくおこけり

時習

歳旦

雪解る春の水もくくおこけり

年三

歳暮

年のとれくくおこけり

元旦 相看而不厭
只有敬亭山

羊内

初まゝいとそとけ
拍はりとほろり
之 登 山

振鷺

羊内

手の言や、こらまを丹おし

梅驢

春真

鞍のふれや、氷をうれそそ

緩駕

歳旦

新しとくさし、はる此飾を

一蝶

羊未

初日新あすめ、このとけあそび

初日のあそび、このとけあそび

元旦

河内弓削

蓮葉の葉小

柯牂

壽く御幸は

春真

梅のあそび、あそび

春真

流るるゆき、梅のあそび

あそび、あそび

歳旦

遠業此淡の汐干や之れ物 其の
 花少重哉清み蒼や居蘇袋 文臺
 任連縄や着水桶乃木給禪 似龍
 けら水や汲わると是れ能乃音 柴滴
 皆人乃好玉葉を舟や福壽州 文鰲
 とく名と呼りそ女にし手男 露角

破广弓や海虫と一し弦の垢 鳳山
 を平の代乃封し毛や飾炭 達悟
 花の色ハ富て強りし福壽菜 周雅

年尾

居間哉おし余辰のころ紙や嬉拂 其の
 海山の變競やとくし此市 文卷
 衣食居の之れ要や大三十日 似誌
 老仕暮し磨乃束やとくの油 柴滴

仙人も春を体とたり大二十日
 掛乞小包してを体やと一此餅
 春まよこ一儂ハ知まぬ除板の骨
 餅乞のささる此約ハ氣う那
 情掃巾面ぬととハ骨を折
 文鯨 露角 鳳山 達悦 園雅

余海、前々略

心まよこさる此骨と然
 乞ぬふこれ

此君亭 樓海翁

歳旦

古きまじ上なき記 鶴此を川若山
 えりや中乃昔言ハ何事へや
 月此と初日の為ハ外此淡
 車秀 素毫 翠石

歳暮

花をとり先南を周とて山
 ちよこ愛しさを使とては言ぬり
 流きれん皆ゆつりて此を飾
 車秀 素毫 翠石

三十五

歳旦

蓬萊に寝て中川海を此岸に

東角

歳暮

高ぶるのほりて 氏を問ふは

春興

襟袂に松とち新梅へ
おこしん外奥

歳旦

大福や青し香もよ記丁子釜

友袋

箆抜の鳥かこち中初夜之

文梁

むとりて梅の葉わや季始礼

花明

初郭や周より明後年の笑

蘭十

初礼や隣りなるとは

郷丸

冬の花

淡雪や冬また庭をぼんのか

雨角

七十一

歳尾

暮らしてゆくも宝をなす泉山 蘭十

傾城の懐積し除衣此衣 文墨

一二編假のいろはや除衣此衣 花明

け手此尾ハ又花乃指す一先 心丸

氣は海山一役させん大海日 友袋

春真

梅咲巾通す扱ふし日此与ふ 花明



春五

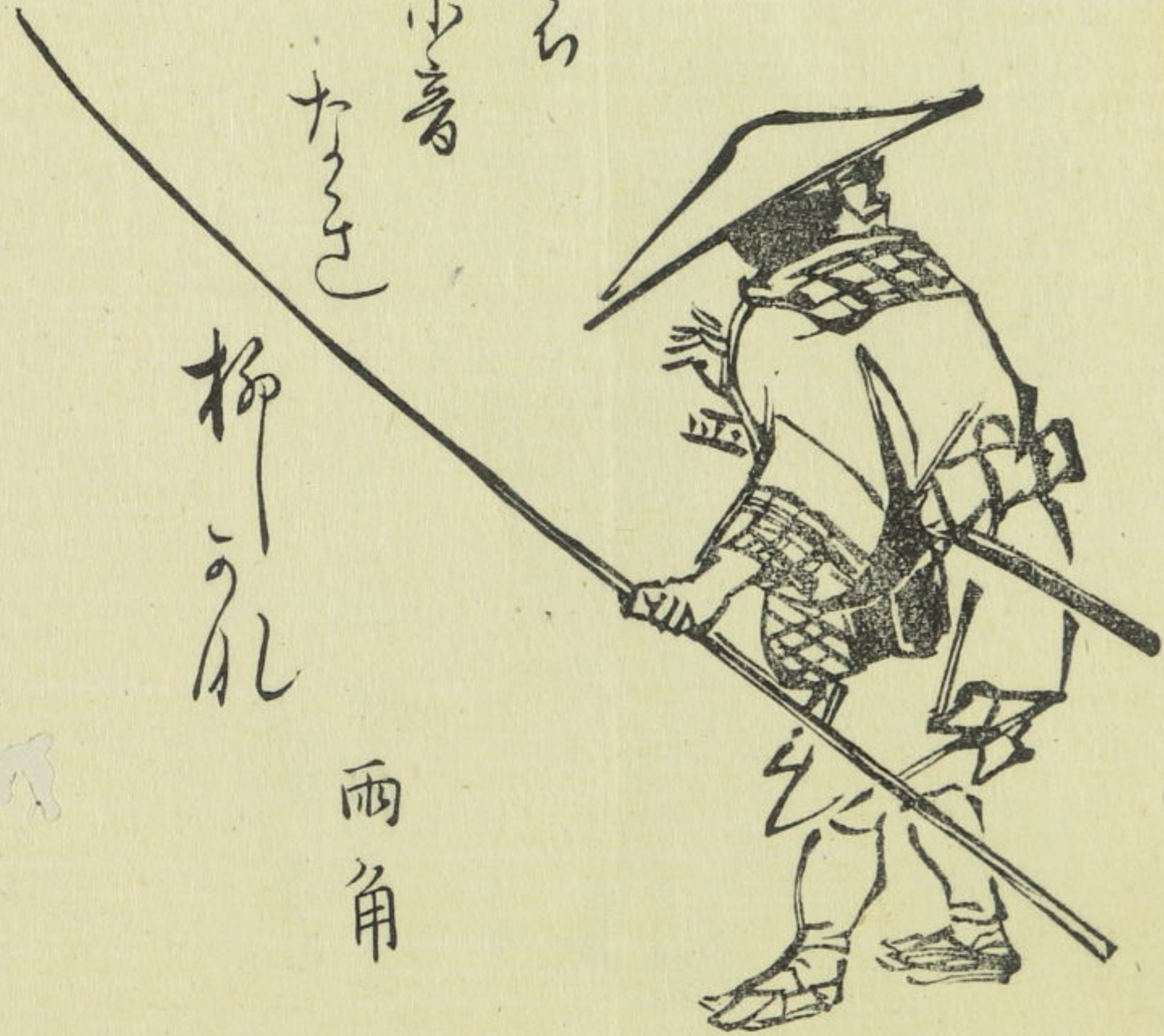
雨此日

流少音

たつこ

柳うら

雨角



七十七

歌仙春五

若叶を子此言うの菫の口南川	翠石
川くく一芽を吐く大春而	東角
芽附を賣味大春此啼く	翠石
上方啼又中春之仮名	東角
仍く木此枝、弦うら月の弓	翠石
銀臭性よそそ菊の清鮎	東角
高取の旁此之由く菊人形	翠石
芽ふを借乃首うせ	翠石

三十八

垣百之哉所ら道はるるるる筆

翠石

常持はるこほへおしよせ

东角

甲胃てもうねまをそそ終

翠石

瘡痂色張りそを仮官

翠石

山崎の鼻ハ浪花の猿田彦

东角

月小傳出火精を約る丹

东角

去けに座屋乃息子貴炭扇

翠石

坂东彦此拳小せききら

翠石

蔓ものハ花れ衣乃志つけいと

东角

夕干もやるとの文依伊丹屋

东角

知行亦不教し釘立体か得よる

翠石

かつれもの之はふうとそい遊

翠石

口説時あまの年ハおねと

东角

肥後飄葉小玉ふ一を以

东角

おと入へましく福しかりせ重

翠石

頻小隊る止色ハ瀬の音

翠石

老頭の高突より一高信

东角

勅使まてな守サ列その苦衷

东角

教えま幅しそ海舟中一の島

翠石

悉皆人の世話しきやく

翠石

世十九

也返中或立まら月のみ仗 翠石

こころせね本を血判のか 東角

吳服屋へ仕入依秋の東山

け塔忽も 惣領のこめ

角う矢れ八千八筋天下筋

櫛こ刃をここの續く糸お

是も花家進子拭保り多て

振はきしは終ハ靴靴 翠石 東角

右弘前連

歳旦

青森

蒼く舎

出せし又家不帰を 文鱗

福正町 州

山家

寒を造り 精

儀の

園 見え

春具

東をと

難波便也

うゑのも

文麟



歳旦

相前箱館

碧水

叶の名又筆書

福壽海

歳尾

雪月舟友達

うゑのも

うゑのも

全



正朔

姫氏園中日紅藻紐之赤尾此音

浮果

双心一移に青陽の色

句龍

傀偶所志はし髪のやりをて

瓊雄

歳始

目小拾ふ福翁〜巾の巻の妻

如鏡

两袖の福壽れ級やきたら〜免

女
梅架

春鳥

昔舟れせむあゝ——掃乃心
かゝ網の雲高きししう免れ花
府内牧 斜江
青友菴

歳夕

月花の園書進比良れ幸の炭
堆——年のうらふおきて白
かたおれ油燈のやうあつはる
以てしやきりし幸もかき始
浮梁 如鏡
はいり
斜江

歌仙 春鳥

堞垣れ園のうらやんめ此花
ふくく衣を文雨よるは
空を掃くを蒼れ羽音響をて切て
さささゆしおりにろき里
を網成飯乃聖代浦乃月
掃除さるゝの幸も秋
室此市家く碎人を取けり
能おのぬふはきしうらん
浮梁 句籠
柳枝 水鏡
浮梁 柳枝
如鏡 浮梁

八十五

必と夕日哉送海松乃風

柳枝

加田の菊と居らう海松と

如鏡

而後さし祢宜う替古を兼つて

浮果

ささくぬ代小強し海松

柳枝

初寄小強人を及ぬ公家此領

如鏡

おきさ川鴨のあそぶ海松

浮果

節用て二三字淺く塔の銘

柳枝

再小ぬまきういともゆの菊士

如鏡

そと雲小り雪小半ま花の旅

浮果

花の中ををかまふ舟と

柳枝

霸王樹のこくえん海宗と備

如鏡

學者同士の海松と合信

浮果

仕返し北伊勢中日向小科も入

柳枝

孤乃壘塚ま島山系

如鏡

制れし女の糸と かのばちと

浮果

新きそ薙刀額と海松

柳枝

無礼講衆席やうもろいん

如鏡

基氏の料理と海松

浮果

樓の額乃うつら

柳枝

景北葉小うつら

如鏡

宵に月あかりさ満をば露籠の借
 及びの矢さそし小枝の寄及
 多敷し中と雲を伴く月一
 詠交をあらん魔所の於水
 大寺や磁石より世々奥を院
 帰朝してわら玉字をりすは、
 華は花こころの憂しけあそり
 價をさそ樂喜もら 宵
 冬景
 橋を此夏少海より初時る
 浮梁
 柳枝
 如鏡
 浮梁
 柳枝
 如鏡
 白流
 如鏡
 柳枝
 如鏡
 白流
 如鏡

歳旦

豊後岡家士

鞭乃音し悉う子度され初音は
 齒固ややしてあ枝の初候
 新吹の歌うやしくし福寿草
 本音の さま成りて
 斤孤をよりの灯むぬれむ
 一手の矢れ根をさそし一おね
 名山麓の梅も笑ふや年の二面
 白徳
 百留
 花鈴
 花鈴

十五

歳旦

七尺の糸籠高——初日此か

除夜

賞人し賣人し越ち布袴の青

歳旦

初日千鶴の法此あこま

歳末

春結市龜の脊巾乃赤白

青帝

依保娘の如し初しん急の心

豊後
官河内

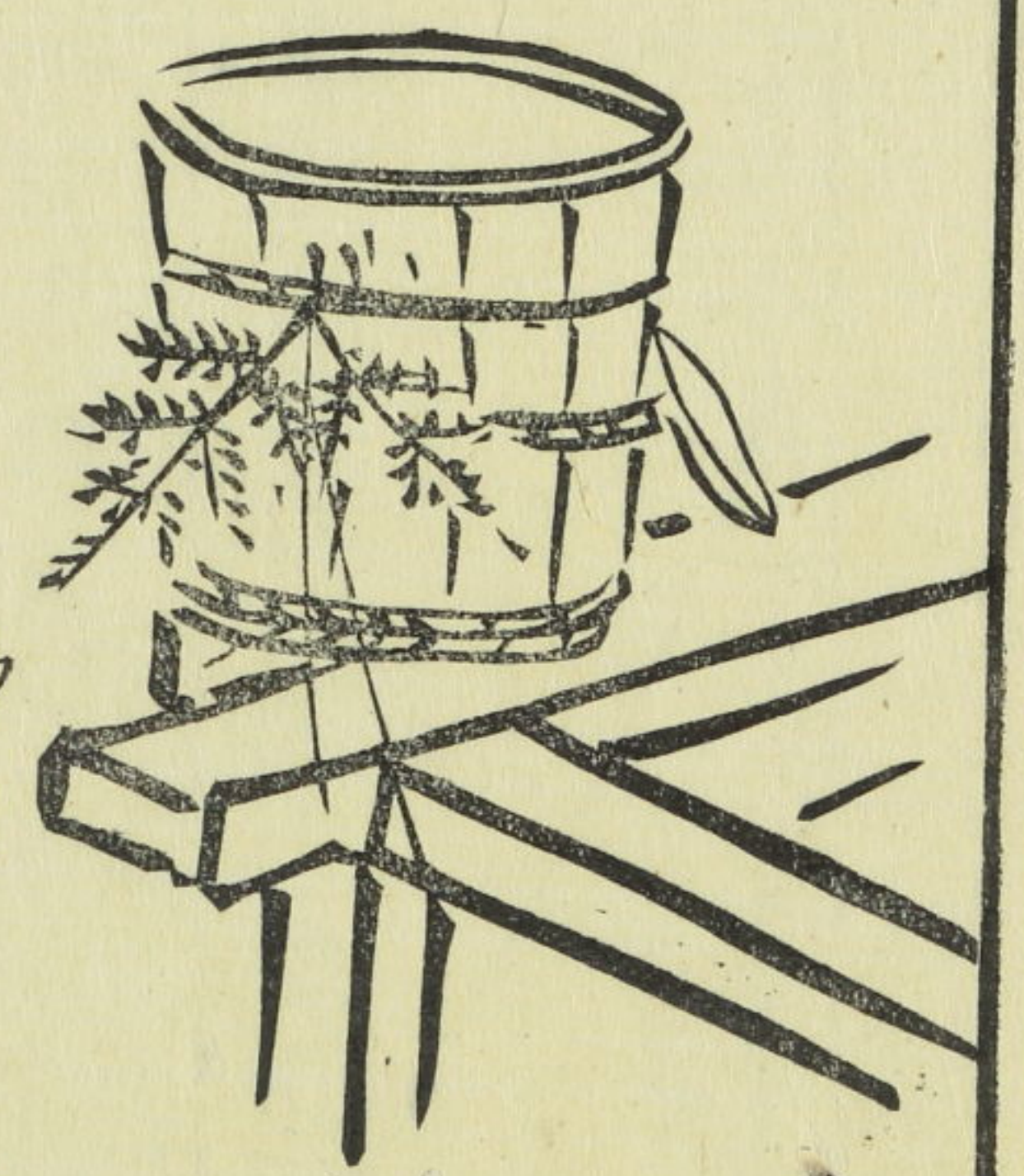
桃林

鶴寄

青布

木佐上

花滴



歳旦

神寄

不来

着水此香巾浮橋乃解糸

梅澤山小曲豈る伝玉

鳳鳴館

十六

歳旦

豊後
小浦

今或玉一色也松暖初日新

官水

け浦初よ道草あの花

勾籠

遙か所書白連紙旅らひて

郊花

和歌

波風こたうき信の湊る

友あ

除元

あけし世と今と小

豊けしれ翁さへし海年の紫

青友菴

天地の洗滌学や此代のま

歳旦

豊後日出

あさめりや古傘しを明乃去

三笑

年尾

貫たうし年をもや人小衣をもと

春景

まど野駒乃口小淋し去の竹

六十一

六十一

歳旦

伊賀名張

代々孫のし之ぬえのまはる

可柳

所慶の小鶴のまはる

白松

まぬまの波のうぬ(鯉)浮て

白花

せいほ

まあると〜まらるるに

可柳

つうはし碎機嬢

試筆

雀のしりし

攝時友

書初

ん筆をまはるなり

省樹

花の咲ひの程のり新う耶

尼寺

あまけを知らんし角双巾

加幸

宝船をひらけりてまらるる

天満

蟹久

神の種をまきし

伊丹

几帳

水仙をまきし居り居り遠

全 必彈居

路貫

喜興

瓦葺きよりいふ事あり
うきこれより

京都
不老菴
亀上

人日

くはき種此世をく
七種州

本年より二人めの孫を
祝し

不作し氣し又もくや事忘

歳旦

生子にや〜なほ也と物のみ

京都
嵐戸

歳暮

札也〜祝新店やまぬくを

喜興

古草を〜るふまひれすか

城南平尾
古鳳

上京を道を通り守

京都
武然

歳旦

多水稲種休心月〜取とは

伊賀名張
和秀

増てよま豆を越し初を坂

八十八

歳旦 羽州秋田能代連中

何れ玉手珠子にりるる流世親王
 何れまきし初日いそ山に初日か
 生れ流初日を代へのあき子
 えりや系(生れ)伊勢の人
 珍珍とけし新玉に山日か
 面公の古作はけあし初日親
 と山とや額律仙子男山
 志々れるや幸木の芽草おま

静里
 貫時
 硯漁父
 宇北
 戎山
 知龍
 巴江
 左天

歳暮

世のま月や文く仰乞の血よる
 よひ事の續く園に花事の笑
 備とや船幸も諸と成ふたり
 雪のけし玉清とを抽らハ明き月夜
 大雪の常りいよ沙をるふらる
 赤松町ハ魚鱗ふりてきき法を武志
 いやきしし事の屋上の夕り新
 穴熊やとくをへらばのだん袋

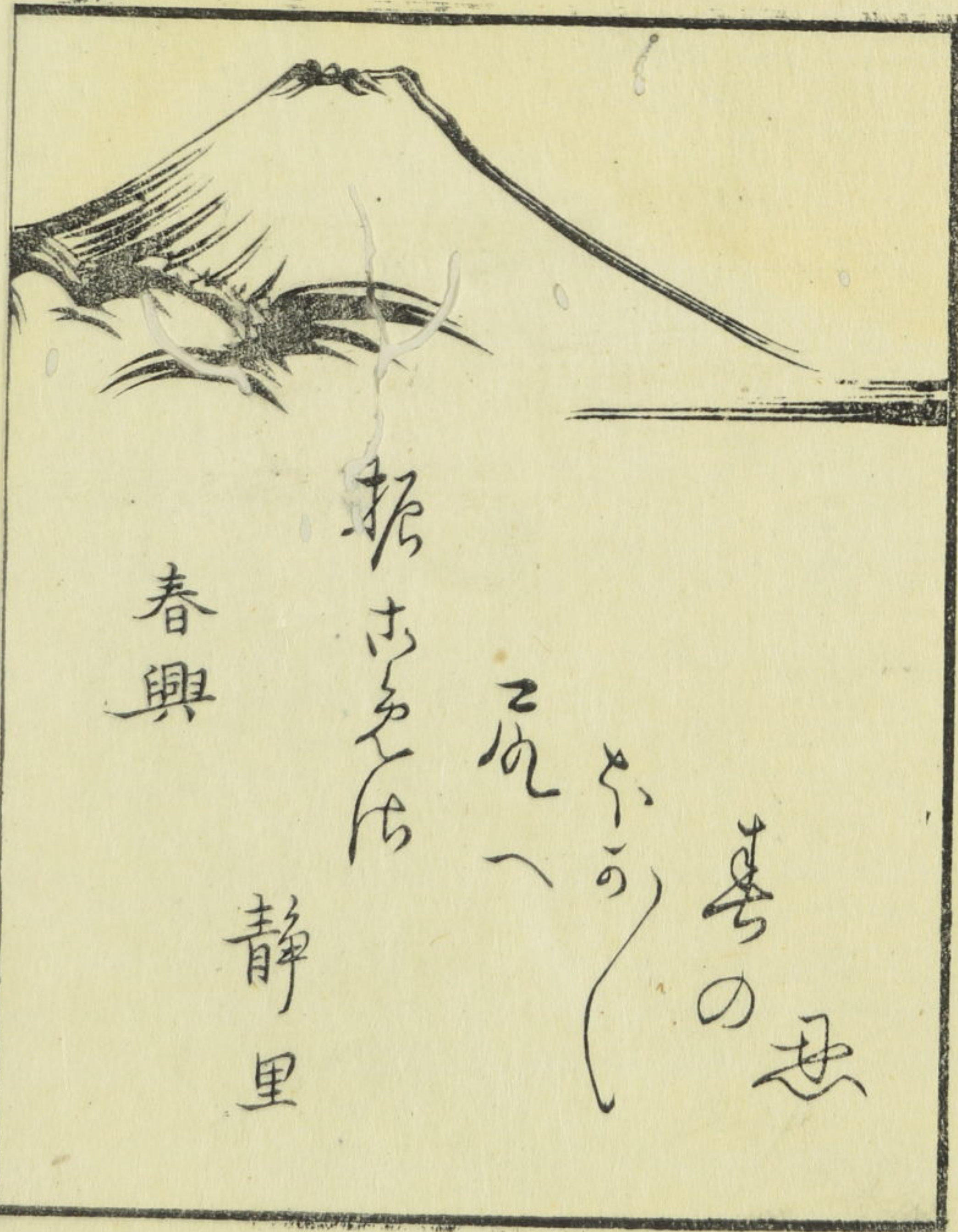
左天
 巴江
 知龍
 戎山
 宇北
 硯漁父
 貫時
 静里



春興
 宇北
 花の早や
 低く
 花の
 花の



貫時
 魚
 數子般
 魚
 魚
 魚



春興

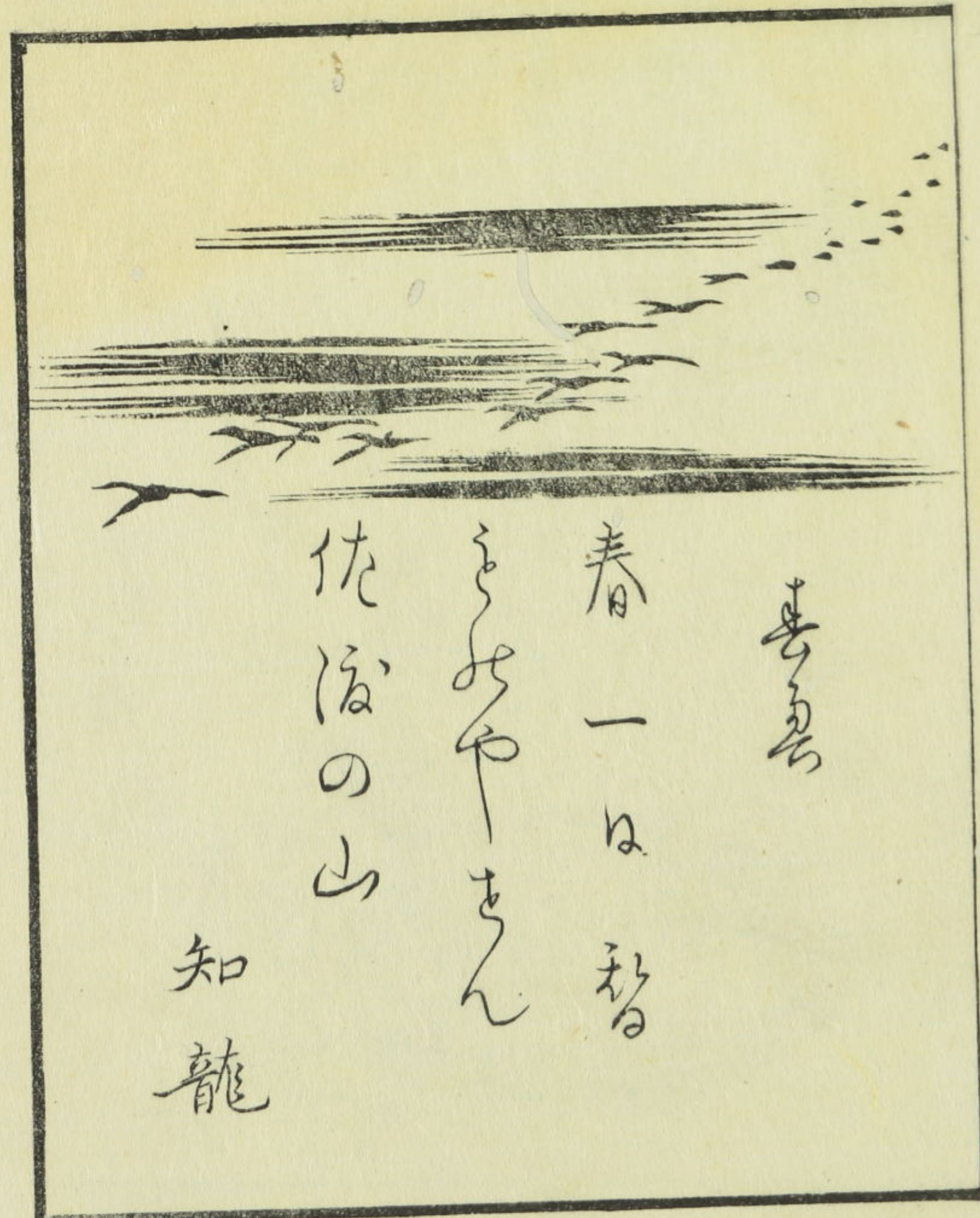
静里

振志多作

乙丸へ

ふり

善の悪



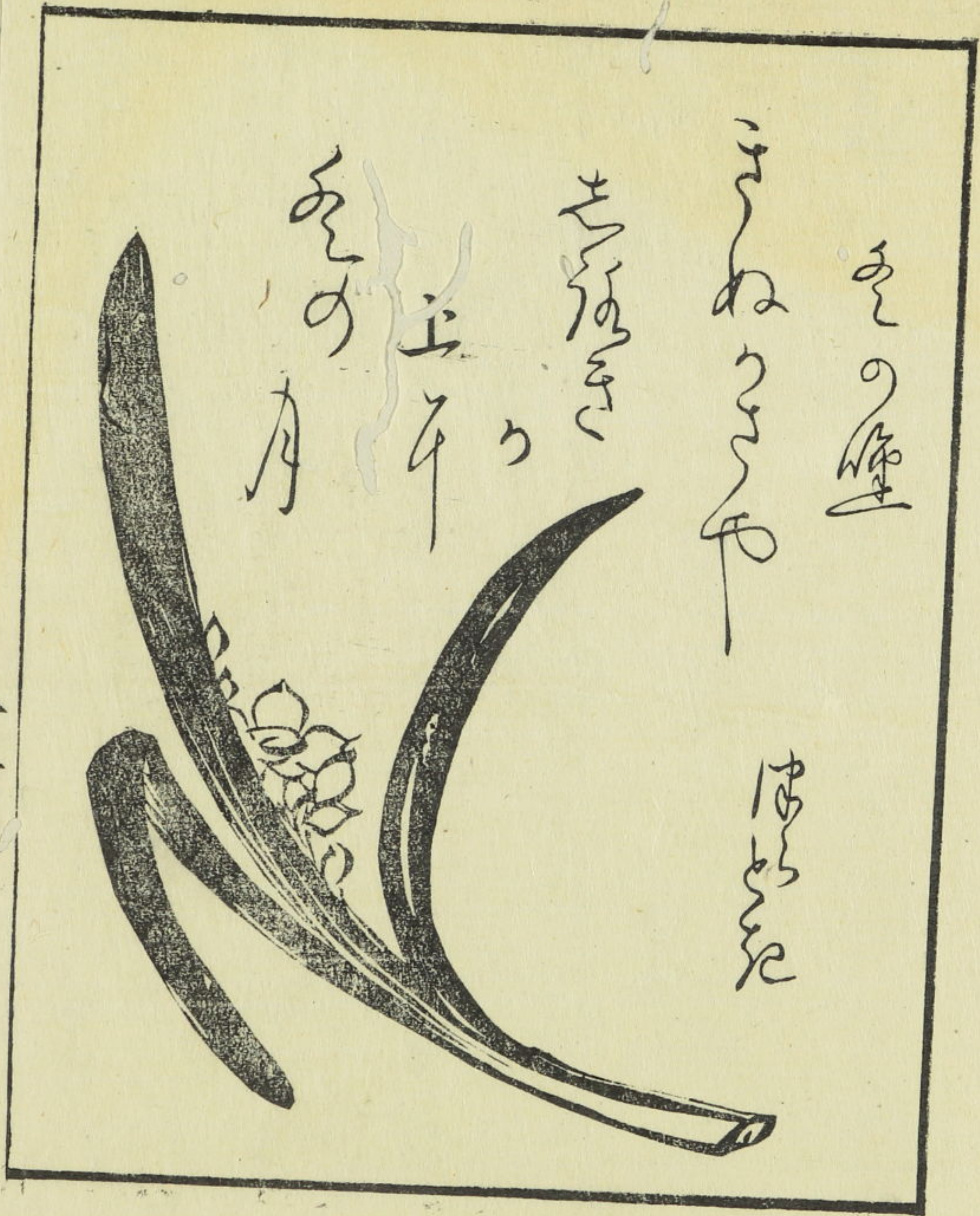
善の悪

春一日 替

もせやもん

依波の山

知龍



九十二

歳旦

泉州熊取

睦中一ふねいそや中門くはり

百遠

千鶴あそいぬきやあそい

白紙

くわいそ宗哲塗を本地よりて

赤文

手箱

掲すよはつるや事乃は瀬川

百遠

よひまき

まやりけりてを二ん此波の注連

歳旦

同所

いふそしゆそあーこの節

嘉友

さひば

重沼の矢敷やとー此射揚的

歳旦

日佐野

餅まきいふ先かひは玉の喜

省已

餅の神まいふふゆいあそひ

布泉

歳暮

大の字は指しきまや大二十日

布泉

あそひ事を知りてはくはれそ

省已

節分

とせ越ん去事ととー此夕境

布泉

氷柱

大妻をばるひりけり流の糸

省已

奉旦

白馬れ終るやあらん非のま

泉州吉見 慮風

せいふ

朽せぬハ文なり代く乃宝船

せいふ

ま和喜ハ方少事此れ衣とけりま

ま和喜

似合しや梅さ富れ節のま

伊勢神都 麻齋

歳暮

は南矢喜る色いさなりやひのま

竹茂

いさなり

手のゆき雲哉と越れ柳りれ

春路

歳旦

初日のまをま

和州郡山

粧ひをより改めりけり袴

何龍

初り新玉のまのらんや一葉此笑

布水

新玉此一天

和喜や人のま

烏黒

歳暮

をりく賣まよむあやをきく和心

烏玉

煤掃や居宅の蓋を種柳り

何龍

正月の入は小さ次鱒り那

布水

歳旦

白くまゆ人か松の香四方の香
四海之れ和睦之れ此終る

伊与栗太町
知柳
瑠眸

若和若川松信え遠く此を福
重きや右相引のひの波

急柳
瑠眸

歳旦

進むの退易いといふと一歩百歩
勇健体よりなりといふん絶えぬ人
より先の事をいふより後よりいふて

伊与川之江

若水巾先汲初体ころ車

志隆

守歳

年波の満ちて志ころとを信あが



除夜

松よりさき早

松尔翳る形

志隆

歳旦 （白星翁のそと） 伊豫川之江連中

左第やかけく 亦るは道のみ
四北海流乃むつこふ月
象風 圖南

象旦

老後の矢ハワまれりろはけめ
ほのくも吹ぬ春やひう清
象風 虚白

歳暮

ゆく馬又遠くはる士の家
揺るは指小流ありとワれ
花多の便をゆくまむと一れ
象風 圖南



春興

連子

象風

胡蝶山

九十七



歳旦

伊与籠宮

忌之休也初日を四方此丹青小袖 桃輝

白くまうさうく人よあ像 白蛇

梅ちりやなまきと旅の双院うけし 蝶花

歳暮

行くとけきねをいれも除夜の鐘 桃輝

春興

吹ぬりそ紋日乃加る少柳心

歳旦

志のめり金備前佐伯の山此を川其城

ことう子のを共同益原初日の後細黄龍

悔日此十三其城越其花う那黄龍

梅も其城吹る手其城の自在の青柳其城

漫唄其城お許其城は流布梅其城の舞其城 遊山居

東旦 閑居丸局

渦まき布其城水原のき川其城初礼者其城 其雷

妹ら賣半其城草芳加城其城をき手仕舞其城

梅咲も其城よ其城く其城を流守塩俵其城

羽州秋

田

湊連中



歳旦

的のまきききおるこをちり

和人

千壽万歳 富

湖光

夕日親しむの尾の糸よけ

松雨

其引

百福巾父母此知魚の糸我

松雨

老翁や万里安深家の春

素文

松舟や初日此舟る不老門

湖光

歳暮

先年を花河鳥月雪え

素文

何なくとまきつハ儲そ事の坂

松雨

駕りよ馬小のりして海を引

知人

百

まのあま

初ハ辰ノナレトモ
の園

湖光

夕日

舞ハ舞と云ハ
の園

夕日

急波也 瀾也
の園

相島

香ハ香と云ハ
の園

湖光

疾速也と云ハ
の園

私人

歳旦

近江湖東野例

志ねし 御代ふり
福葛あやら

樵夫
枕流

年尾

銀橋也 本名寺を
古曲

松流

加えの餅や
の園

樵夫
松流

井橋氏の
古橋の

まれの
の園

梅守



百三

伊州上野

歳旦

四攝の言及録の録

萬歳館

花橋

一富士や二鷹も小鳥やハの春

採りてみたの物清くは梅

自然

藤とおぼしんきうらゝふ素禊と云

今

稔梢

杖とまきいともさ

花橋

一柳の九十九娘



喜ぶ

花橋

梅咲や

一筋道

をさる 福

百三

歳旦

上野

初野や神代のおく此朝朗

練光

さよふえあふて新しき年

白蛇

むの希男の舞もたはしく

白花

年尾

とーつさ梅の喜影や
鏡の間

練光

普興

多柳や撲

練光

流守

きりき

あ



三

歳旦 少き事例

上野

璞哉 子出さるやこの物 繁樹

年梢

花の向いしつる物と 津後川

年内立春

やそふらん 詠屋位の長此風

春奥

風ゆるし 濱辺ハ 妙の袋角

春奥

上野

日くの日御 柳志

えはあり此柳也

春奥

換採の掛を

ねまは

ハまらる

藝州御手洗連中

歳旦

この祝言をうけあつて

大福あり 香しき子 梅や 梅 幼茶 任土齋 竹子

子 幼少 梅 縁しより 銀 雪 界 鳳 洲

餅も 梅 餅も 主な な 山 や ち 一 男 蕙 溪

おまよひ こと 年 へ 梅 月 の ち ち 家 若 吳 柳

歳尾

餅 梅 和 涼 一 ち ち 一 雪 の 風 竹 子

俵 子 の 梅 名 を と ち ち 一 の ち 梅 風 海

己 の ち ち 一 ち ち ち ち 一 ち ち 一 ち ち 一 け ち ち 一

か ち ち 一 の 行 田 ち ち 梅 ち ち 一 号 柳

ち ち 一 ち ち 一 ち ち 一 ち ち 一

ち ち 一 ち ち 一

ち ち 一 ち ち 一

ち ち 一 ち ち 一 の ち ち 一

ち ち 一 ち ち 一 ち ち 一

ち ち 一 ち ち 一 の ち ち 一 ち ち 一

ち ち 一 ち ち 一 の ち ち 一

いせのりきり

あはれ

いせのりきり

いせのりきり

いせのりきり

いせのりきり

いせのりきり

喜無

岩一浦はらね連

いせのりきり

東屋

いせのりきり

玉柏

いせのりきり

家町

いせのりきり

千鳥

いせのりきり

はゆきをいほ乃々

おとしいらささ

後きぬ

すまのちか

いれをいそ

梯

まろしとた

江戸片

片せ

追か

あふきこも

つるこ

成波亭
嵐戸

元旦

根平野

若水よりつま

徐来

いそ

歳暮

始あより

のえ

長州船木

之部



歳旦

唯の扱小智るさるるさるるの表

花蹄

上下て扱玉ワうい水音

白蹄

牛小鞍さるる此の表をさるる

白蹄

歳暮

一日を暮ると嬌るやう志

花蹄

歳旦

祚風巾門をこ唱ふ松の身

射江

いとゆふさるる注連戦く水

勺蹄

傀假歩をぬ猫をさるる

本蹄

歳暮

まはるるさるる

射江

はるるさるる



歳旦

去年の生結ひ上りりまの氷

蘭吹

大福の片に少世のなほりりん

鷺曉

お叩ふころれき戸の明の曇

芳樹

け上を思ふことなりー花の曇

棹柳

飾海をさけし溜ひををる

五柳

翁をさくろふまらやーこの翁

自翫

開の戸を二戸して横し四方は曇

芳雨

あゝ玉乃玉を貝割くー富士の山

李冠

まももあもころれ徳やまの曇

李杖

横そのは色向へ出るや飾縄

浮船

去年の梅よかに画くや筆始

五峯

横雲と連て初くや福壽州

討龍

歳旦

年玉千丸を好む神魚

車照

着し髪を我妻は亭

句結

出出しの義理は彼り小
くくはひて

環旌

歳暮

え釣の拳と中をよし手忘

車照

歳旦

老て後若うを流日持り名心

素秋

佳例の通る碁は万葉

白部

お強町隣の倉へ水くちて

楠芽

年尾

そ一の壘一をとき

まきと隣りな

素秋

哥仙書

等吊以頃一も家も白ひる
 射江
 ぬ家むとより水のか別
 芳樹
 妻の糸有頂をさむるぬして
 警曉
 掃きそふ地小房る筆迄
 浮船
 出舟月に力の附一もこの和
 葉吹
 山の奥ては花をやは州
 李冠
 呼利のお撲水より上る顔
 車窓
 水練も嗜ては川 恋
 花端

杉やハ赤き理も中と成
 素秋
 名所の風を引流一傍
 棹柳
 辻堂小落おれ増え依障
 李枝
 檜著著此菊の法門端又端
 芳夏
 妙刺をさきて異國の冬此月
 芳樹
 額ハ蒲團さの字をそ痛む
 射江
 見抱小陣のさ川 道 茶寺
 浮船
 湧出さやに富士の講釈
 警曉
 云うを流を流一お花の亭
 李冠
 送云消一小著者彼女嬉さあ
 茶茶

人多ハ慈悲を以て罷仰り

撥人々しむけは毛纏の莖

是河のまをを力れまよひ道

芭蕉よ疵の付一噴

板新小競り見ると依頃丁の月

秋風そ吹く先生り歌

忠望と大子の打し力を佩

姉小惚ろき妹小惚る

氣晴一の揚屋ハ飯の薬喰

陽まよと文字の書讀ぬ埃

花蹄

車照

棹柳

素秋

芳雨

李枝

射江

芳樹

雪院

浮船

草外の中小部りハ市州外

先祖小南と依色のハ浮ハ歌

貸家小高耐を以と楷と梁

白鳥此是代ハの瓦山

一寸の馬小口布乃毛庵人

松州おちち也む化けは皮

花よ雪芳小のしをぬん

鶴のおん小晴ろいとゆ

葉原

李冠

車照

花蹄

素秋

棹柳

李枝

芳雨

歳暮

亥夜小咲くもや幸の重銀花

斗籠

柏子も清——こころは嬉拂

五峰

世徳を学ふ耐く指すやまの

浮船

蝶掃や夜るハ子小まふ祝氣

李杖

春ころ少山を目南や幸の船

芳百

木あこハ筆降て春待まのさし

李冠

大恩の面脱く風呂や嬉拂

自脱

八尺の澁世を履足の年一重

五板

限りなき月はもやりの終ふ

棹柳

夕の道の星を洗ふ幸の川

芽樹

掛乞も何ふ心抱くさきゆふ

管籥

白赤日をま切歌と一の都は

蘭吹

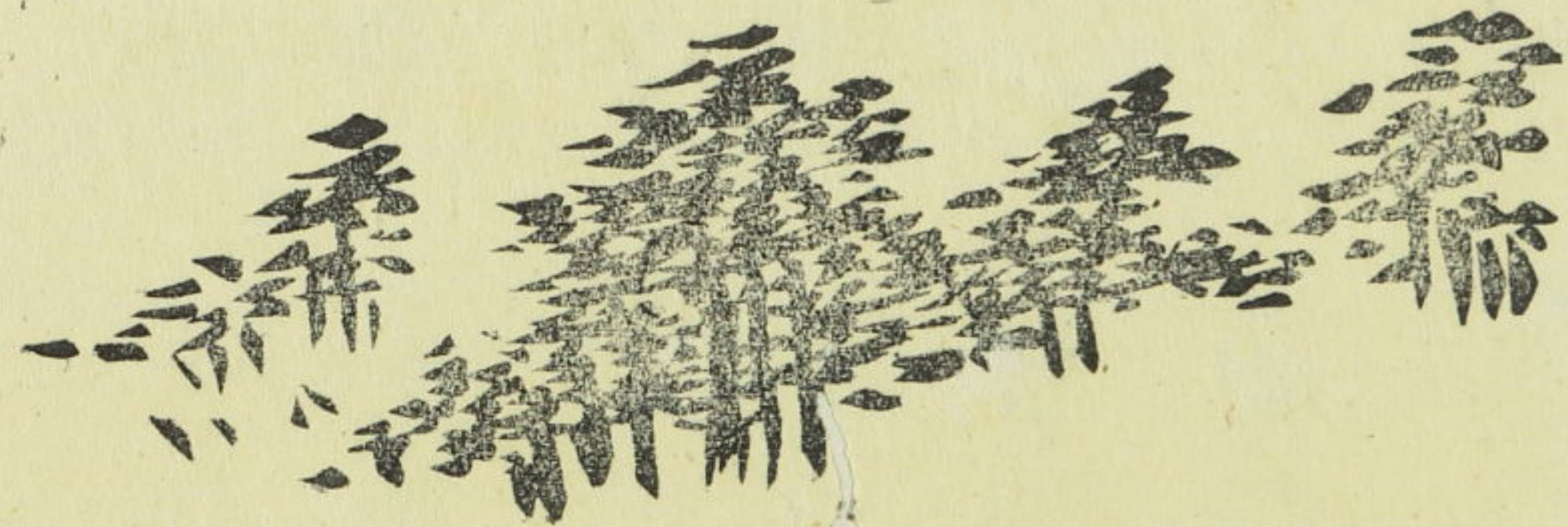
右船木連中

百三

讚岐

津田浦

連中



歳旦

姫國の是れは縁事此は連飾

千古菴

文江

酒樽をそそぐ舞の舞下初

眾源

善寺に筆をまの影及びす

魯山

其二

吹初は福壽をまの縁回影

魯山

と初を代小と初を原若

文江

と謝と初古甲一をまを合て

源海

其三

初を也川もさびけ此波久一 羅峰

袂の如く飾家橋一 喜山

後昔代新体女の脛と膝居て 又江

歳暮

常夏の物をあはし人の救なる 丹後

日ハ赤紗おや手の未実紅 多心

匠心と川あはくはを庵の梅 千古蒼

附引

水清くさうなると玉取るといふ
事やわうして思ひをさうさ

さあ水又照るほく珠や新体一 芙蓉

日まきほし更け代のまき代のは 箕山

先初くく東もほほぬ窓の雲 楚雀

海山しらをを蒼やあ乃春 喜山

ふれより一扇の窓をよ初り氣 文貫

書ふも陰さう陽のすかすか 有隣

ゆるさく水の香けうきさ此雲 佳芳

穂たぐのを飾るや昔年の若老之 溪天

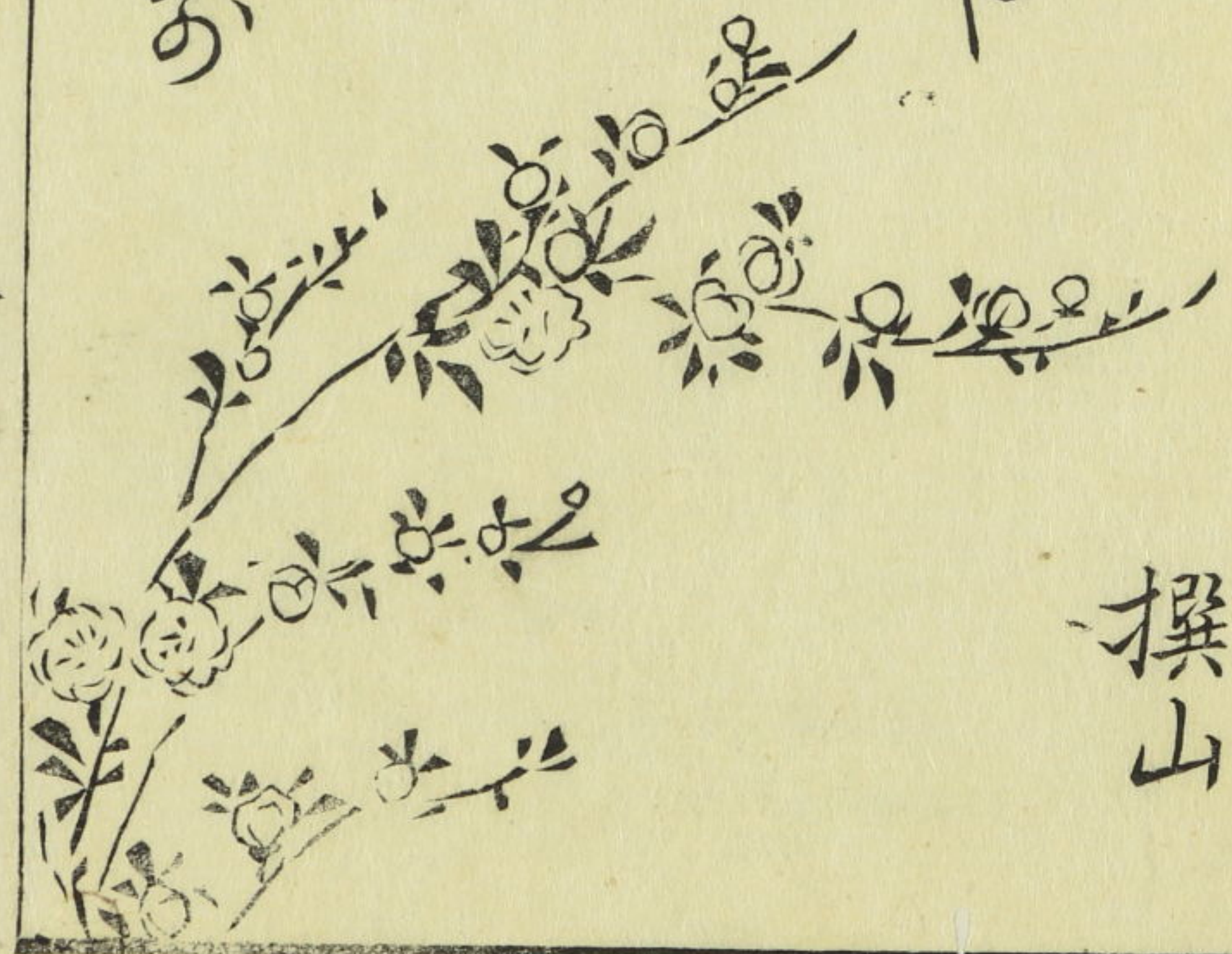
歳梢

年の初や 十二の年の末衣
 餅糰布 送るまよ 玉の蔭
 氣白く 水や空く 米洗
 餅もを禁よ 燈籠 手の飯
 鏡を十ののむや 音飾
 松糸の舟し 初夜 燈籠を
 節のまののりよう 子とはを
 塵掃く 列く 山 けつと 一の音
 天
 徳芳
 玉蔭
 文也
 子と
 楚花
 箕山
 芙蓉

歳旦

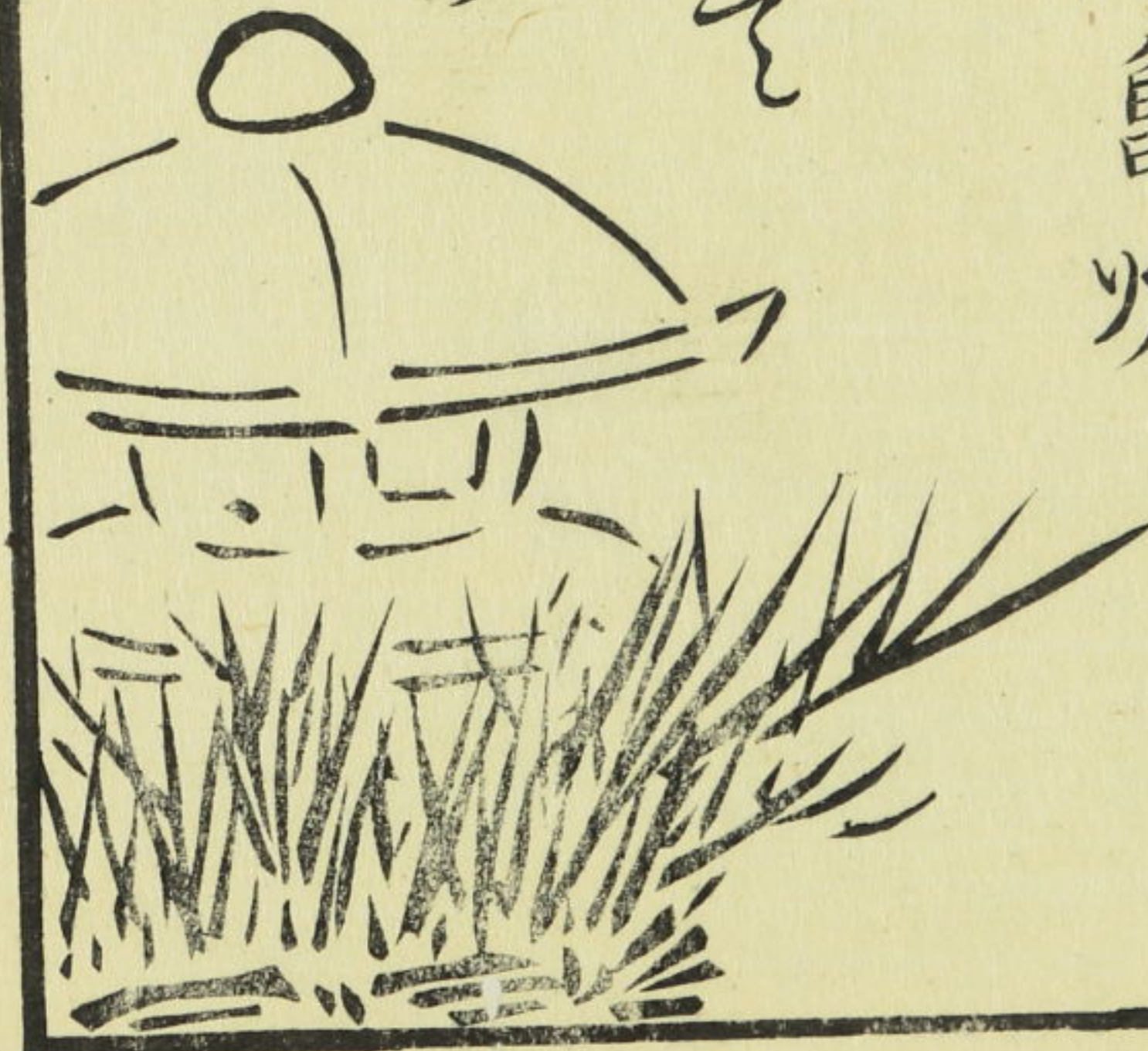
ふすねまに 用や花の初り氣
 山 すすもまらぬ 後や天下
 初ま 秋を落の舞 舞 舞 秋は州
 歳暮
 檜の 花 又 納るや 古 磨
 日 枝 浮るや 雷を 雲 見の 真
 手に 舞るや 流 舞も けり 米 洗
 歳旦
 箕ま ころの むも ころの 釣
 年梢
 ころころと 徳の 梅を 衣 配
 百仙
 泰山
 樅下
 る仙
 湖外
 讚岐高松

去家なるや
 水此中
 玉乃
 加
 花
 浅野村
 撰山



百廿七

春兵 或隱士
 訪侍
 高松
 龜州
 梅、香小
 尋以
 初音



百廿八

春興

日小うたぐ

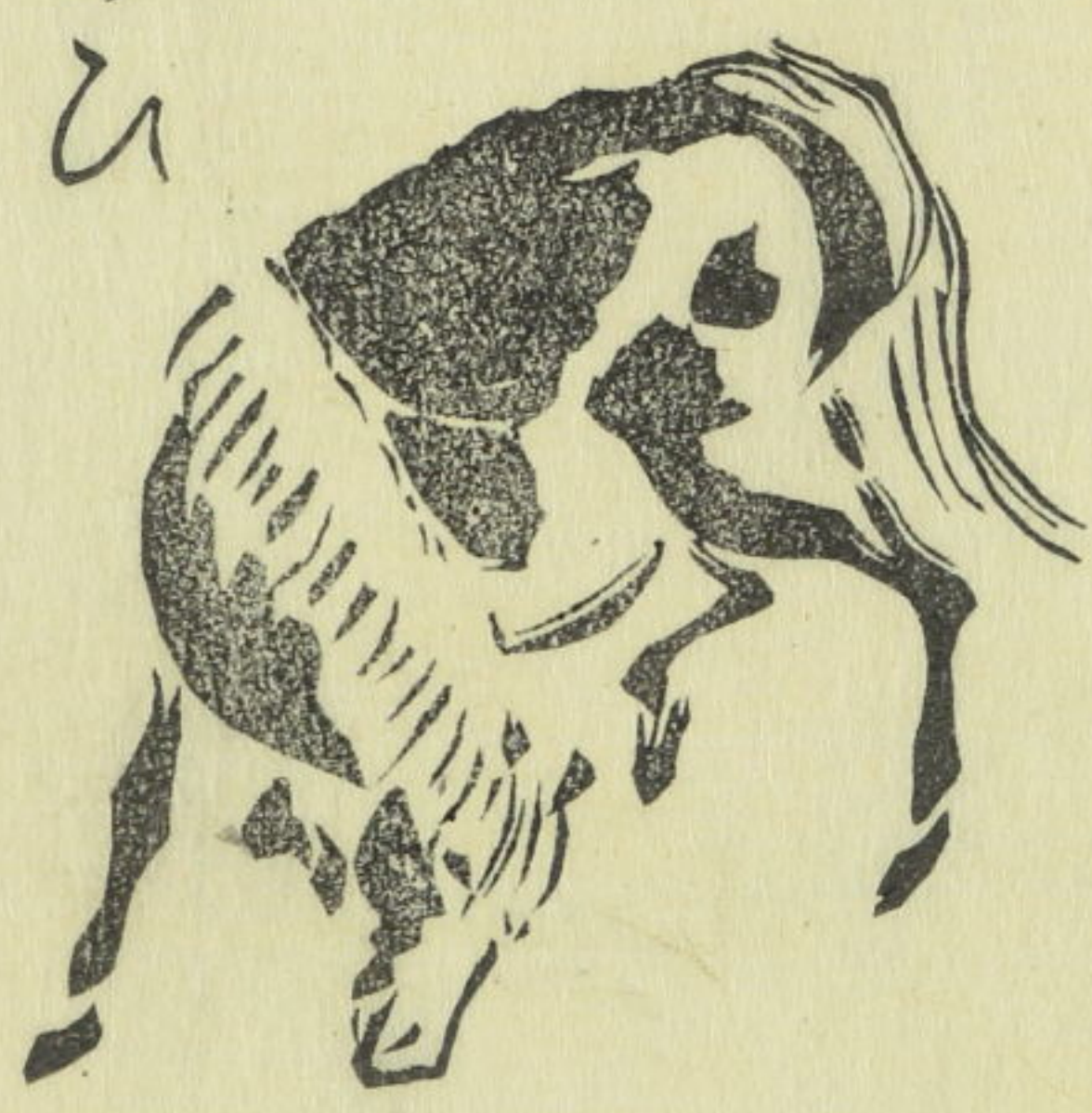
梅や

けき

江の

むらみ

羅峰



喜興

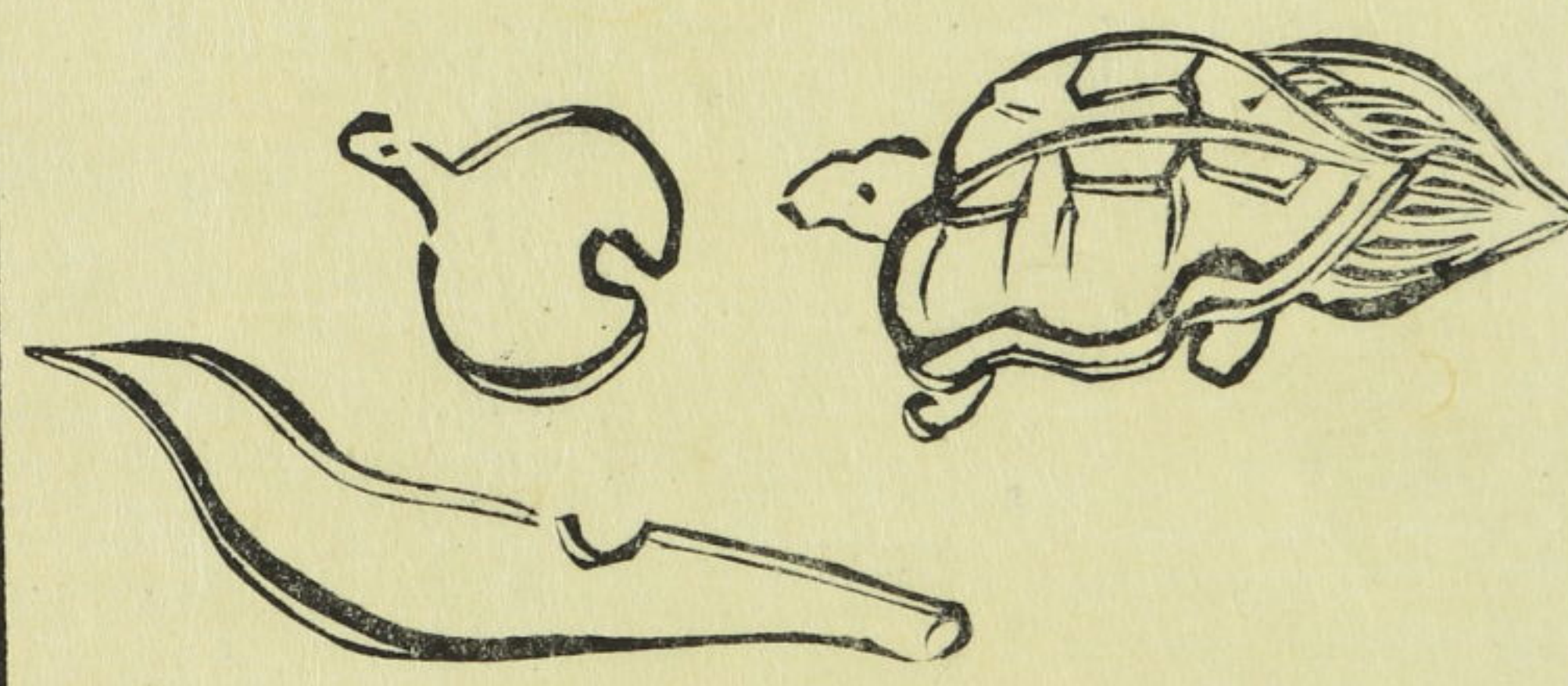
魯山

蒲公也

蘇の能也

傍小

咲



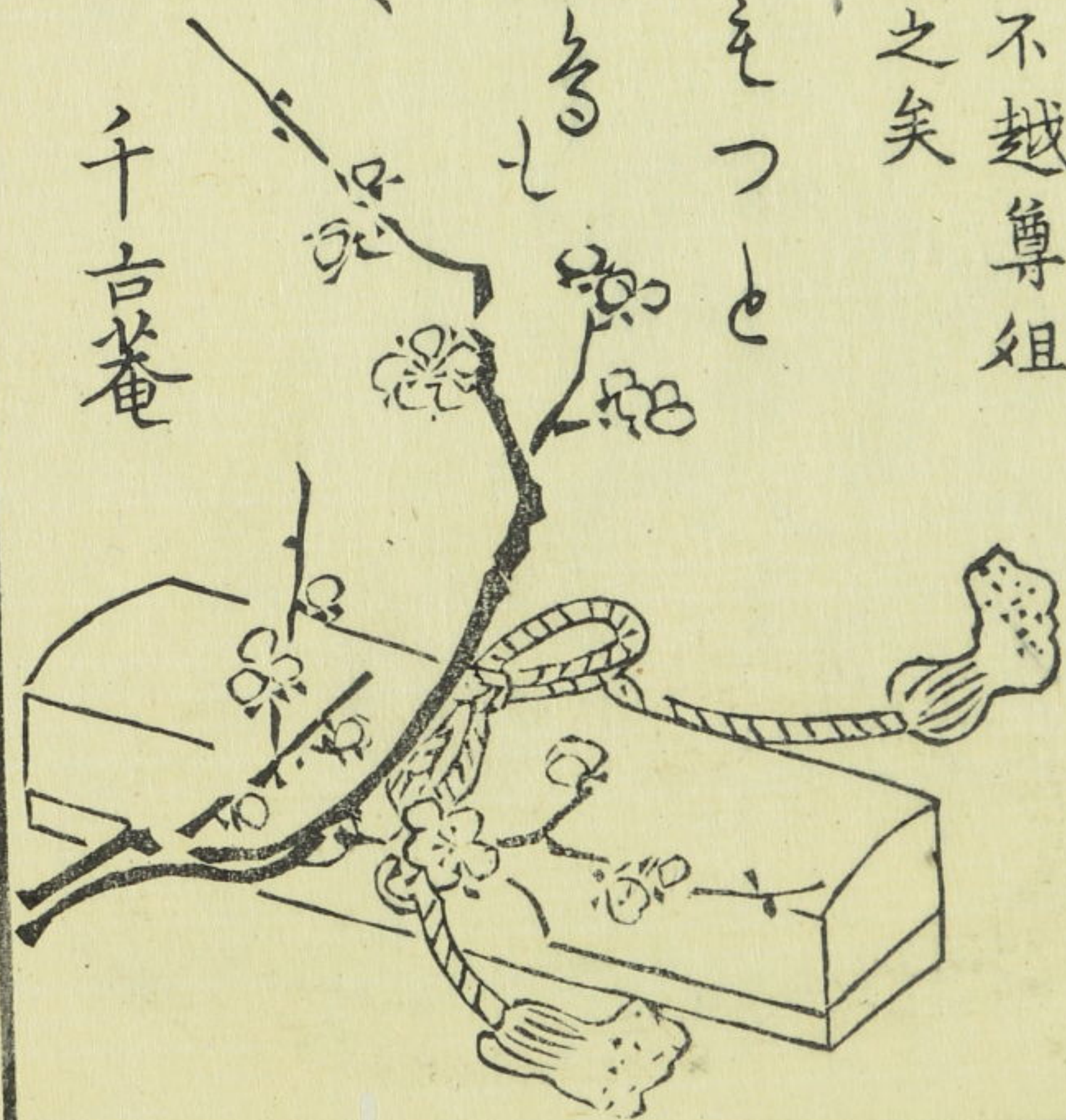
庖人雖不治庖
尸祝不越尊俎
而代之矣

梅のふをつと

奇麗なるを

巧能く

千古菴



春興

讚岐白鳥

化龍

雲尔麻々

竹葉動

うゑの

舞



總州古河社中

歳旦 再んば春の来を待つて

春潮堂

芦もた釣をたししとて初新波

女羅

年梢

掛くも深きも臥竜の草花

鶏旦 福德壽此の字を
多々想ふはて自後一樹養

福德壽を月の影に答りて 李石

好く 菊を花に採りて

女羅

菊の霜の手ぬみさの根をたて

歳暮

年の久し保つるもささけぬ 李石

三元

大福のまきと初色んと初の色

石別家

青我

年杪

年せはつとまはし梅の香を

東君

未廣にまきとむらやと朝のま

愛之亭

池柳

年尾

春んて実をまきと川やと此園

歳旦

春井よりめまはし宿の初はうを

紅華亭

奇柳

歳杪

春に底より春の矢強く追難し

新春

智直侍の明りて月夜に玉の香

セ心付

以久

海つち花浪も豊りにとて此子

春興

香小立り九雲井の雲舟人の此と
入おをさあつてそらる花梅葉

早春

李石
以久

咲初し梅も麻子小蓋うり利

稻荷山

奇柳

在所女の依代粧も菽此ん免
淡雪巾田楽喰つて太の鼻

池板
女菘

人日

折檻のたふさくしと見茶うる
姐の舞衣も廣きさ萩くれ

春雨

李石

喜多布懐中花も香うらさ

酒大吟

池柳

一門の涙を吸て鳴る

日所 内裏花

女菘

南門の破風口まら干葉

紫雲

又はまおとそとて焼く

白鷺

歳旦

長州長府社中

け日より花のそと

五穀

福壽艸

春奥

糸ゆきよきとえん

柳心

歳旦

夫は戸も垣も今ぞく福あま

砂鍊女

聖なるそと初なるそと除夜の言

春奥

山城の海をそとそと多はあま

糸屑

隙と隙を一すゆふとく惜

歳旦

西の初日鳥也 波の上

鷺旭

指おきこしおきそ除夜の鏡の言

春奥

人は氣の徳をそと人々の身

歳旦初老

年四十口う水きそはゆる此きの

立巖

春野

高きやあとしのこゝろ多柳

歳旦

改らふ心しや鳥のさうまも

在三

春野

月しころもまゝくあさう林のこ

元日

初雪や心ふ竹如鶴のこゝろ

長州下津 壺天

春野

雪もさう悟りも陰秋の嶺も

春野

うなれきの晩のあまや 林舟

以下遅参

元旦

恵むりやふけおろそを川を

南都 巴笠

たのつゝ尾上げし門の松

波翠

歳晡

年を拾ひて喜へとあつた鳥うな

波翠

剣此やあまんと晴れ 此園

巴笠

春野

寺ねまや侍や方を海岩此花心

和名御所 詠風

春野独歩

天系よたより小板梅 ちん花

泉南 佛菴

降る雪は霞を成り懐ふ

来りて吹く風もそはけりてあささる

楠芽

庭をその海をみたりと成りてふれりる
こころは花れとありおきてまきまき

海をみたりこのまはれとふ山うつら

環雄

寄古詩

あきしつて振袖初よもしののち

あけりの園中ふささくをさるる
はすも尻をさかして

されをせとをの香ふ見たり

楠芽

重之

雪成水くくうめさゆ 白り南

たのき地
なんが

竹馬の武者まれば極の海

長州長府

正朔

和晴菴

梅青

元日始あやふす初日新

元之國一可なり

白松

あけのちつこうもぬり

白花

歳首

あけのちつこうもぬり

梅青

あけのちつこうもぬり

彫工

大坂安土町せんごの本筋

藤村弥兵衛

野口

野花



百三十五

